

池田大作が「戸田大学、で学んだこと」¹

塩原 将行

はじめに

1. 「戸田大学、という言葉はいつから使われるようになったか
2. 「戸田大学、は「人間学」の天才による個人授業
3. 池田大作が受けた薫陶を時期に分けて考察
4. 戸田による日々の薫陶
5. 民衆救済の「大志、
6. 「戸田大学、で何を学んだか
7. 創価学会は「校舎なき総合大学、
おわりに

はじめに

「戸田大学、は、創価大学創立者である池田大作が、師匠である戸田城聖から受けた薫陶を意味する言葉である²。この言葉は、戸田と池田の二人の間で交わされていた。

池田は、1969年に発表した随筆「人生に負けてはいけない。」において、「私の人生に、戸田城聖先生という、恩師がなかったとしたら、今日の私は、無にひとしい存在であったにちがいない。——この事実を、明確に気づいたのは、ずいぶん後のことになる」³と述べている。また、アメリカ・コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジで行った講演（1996年6月13日）では、「今

Masayuki Shiohara（創価大学池田大作記念創価教育研究所客員研究員）

¹ 本稿は、アメリカ・デポール大学池田大作教育研究所の修士課程プログラム「世界市民育成のための価値創造教育」の「戸田城聖の教育哲学と実践」という科目で行った2回のオンライン講義「「戸田大学、とは何か」（2020年6月6日）および「池田大作が「戸田大学、で学んだこと」（2021年6月5日）で語った内容」に加筆したものである。

² 池田の著作では、「戸田大学」もしくは「戸田大学、と書かれることが多い。本稿では、原則として、「戸田大学、と表記する。

³ 荒垣秀雄編『人生の恩師 私のもう一つの勇気を目覚めさせたもの』（大和書房、1969年）、17頁。なお、池田大作『私の人生観』（文藝春秋、1970年）では、「私の、人生を決定づけた、もっとも、大きな存在は、戸田城聖先生であった。したがって、私自身の、人生を語るのに、戸田先生を、ぬきにしては、画竜点睛を欠くことになってしまう」（15頁）と記している。

の私の98パーセントは、すべて、恩師より学んだものであります」⁴と語っている。本稿の目的は、いわゆる「戸田大学、がどのようなものであったかを考察することにある。

「戸田大学、を考察することには、次の三つの意義があると思われる。

第一に、1930年11月に『創価教育学体系』の第1巻を出版し、小学校から大学まで、「創価教育学の学校、を設立したいと語っていた牧口常三郎と、創価大学をはじめとする「創価」の名を冠した学校を日本のみならず海外6カ国・地域に設立した池田大作は会ったことがない。この二人をつなぐ存在が、牧口の弟子であり、池田の師となった戸田である⁵。池田が、「戸田大学、において、どのような薫陶を受けたのか。このことは、牧口から戸田、戸田から池田へと継承されてきた「創価」⁶の根幹をなすものを考察する上で欠くことはできない。

第二に、池田は戸田から何を学んだか、それを切り口にする事で、戸田の姿がより鮮明になる。筆者は、「創価教育の源流」編纂委員会の一員として、『評伝 牧口常三郎』（第三文明社、2017年）および『評伝 戸田城聖』上下巻（同社、2019・2021年）計3冊⁷の執筆に携わってきた。月刊誌『第三文明』における「創価教育の源流第一部 牧口常三郎」の連載後、直ちに「第二部 戸田城聖」を執筆したことは、牧口評伝を単行本としてまとめる際に極めて有益であった。今後同様に、戸田に関する評伝の研究には、池田に関する研究から光をあてる必要がある。

第三に、前述のコロンビア大学の講演で池田は、「『創価教育』、すなわち価値創造を掲げた一貫教育のシステムは、私が受けてきた、このような人間教育を、未来の世代にも贈りたいとの願いを込めて創立したものであります」⁸（下線筆者、以下同じ）と述べている。池田がどのような薫陶を戸田から受けたのかを知ることは、池田が示した「人間教育」を考察する上で、手掛かりを得ることになる。

1. 「戸田大学、という言葉はいつから使われるようになったか

(1) 「戸田大学、は、戸田が言い出した言葉

最初に、「戸田大学、という言葉の誕生について述べることにしたい。池田によれば、「戸田大学、という言葉は、戸田が言い出したのだという。池田は次のように述べている。

⁴ 『池田全集・第101巻』、428頁。本稿では、『池田大作全集』（全150巻、聖教新聞社、1988～2015年）について、『池田全集・第0巻』と表記する。

⁵ 牧口は、戸田に創価教育の学校の設立を託していた。また、『創価教育学体系』の第1巻出版（1930年11月18日）から20年になろうとする1950年11月16日、戸田は、池田に創価大学設立の構想を語っている。これらについては、『座談会』牧口先生の思い出②』（『牧口常三郎全集』の「月報6」、第三文明社、1983年3月）の5～6頁、および、『評伝 戸田城聖』下巻の102～104頁などを参照。

⁶ 牧口・戸田・池田の思想や幅広い実践を含む意味で、「創価」とした。

⁷ 以下、本稿では、『評伝 牧口常三郎』と『評伝 戸田城聖』上下巻について、出版社と発行年を省略する。

⁸ 『池田全集・第101巻』、428頁。

かつて、戸田先生は、私にこう言われた。

「お前を大学へ行かせてやりたい。行かなければ、社会で大きなハンディを背負うことになるやもしれぬ。しかし、人間の大学、へ行けばよい。信心の大学、この戸田の大学、へ行けばよい。人間としての最高の力をつける全人格の大学とと思って」と。(1987年、創立57周年記念勤行会)⁹

ルソーは、「ほんとうの教育とは、教訓をあたえることではなく、訓練させることにある」と結論した。意味の深い、大切な言葉である。

私は戸田先生から、訓練を受けきった。一番の代表として、朝から晩まで先生の側にお仕えした。それはそれは厳しい訓練、であり、教育であった。

先生は「戸田大学」と言われていた。二人きりの大学であった。その薫陶を受けたことが、私の青春の誉れであり、幸福である。(1997年、第1回全国学生部幹部会)¹⁰

(2) 池田が「戸田大学、という言葉を使い始めた時期

「戸田大学、という言葉が、出版物で最初に確認されるのは、読売新聞記者の浅野秀満が1970年に上梓した『あすの創価学会』（経済往来社）の、池田へのインタビューをもとに書かれた次の部分である。

大世学院¹¹を中退してそれからの十年間、三十歳になるまで日曜日は一日中、普通の日も毎朝一時間の戸田大学を受講した。この講義が池田をつくり上げたともいえる。(232頁)

その後、池田の発言に「戸田大学」という言葉が確認できるのは、実に25年後の1996年である。ただし、86年からは、次のような表現が見られる。この頃から池田は、「戸田大学、について語ろうと考え始めたのではないか¹²。

〔戸田〕先生から私は、一対一で、いわば塾生として教えていただいたわけで、今もって深き感謝の念でいっぱいである。(要旨) (1986年、創価女子短期大学記念撮影会)¹³

先生は「苦勞をかけさせて悪いな。君の予定を、私が台無しにしてしまったな」と涙ぐんでおられた。そして、その代わりにと言われながら、日曜日をはじめ毎朝、先生みずから諸学問を教えてくださいだったのである。

⁹ 『池田全集・第69巻』、472頁。

¹⁰ 『池田全集・第87巻』、406頁。あわせて、『聖教新聞』2009年11月3日付2面を参照。

¹¹ 「大世学院」は、富士短期大学の前身となる学校。池田は、1948年4月に政治経済学科の夜間部に入学した。

¹² 池田が1965年1月1日から93年2月11日にかけて『聖教新聞』に連載した「人間革命」、および、単行本になった『人間革命』全12巻(1965～93年)には、「戸田大学、という言葉が見られない。2012年に『人間革命・第4巻』が『池田全集・第145巻』に、また、2013年に『人間革命・第7巻』が『池田全集・第147巻』に収録された際、「戸田大学、に関する記述が加筆されている。

¹³ 『池田全集・第59巻』、297頁参照。

それが全部、私の身についている。

いかなる大学も及ばぬ最高の個人大学であった。(1993年、第64回本部幹部会・第7回東京総会)¹⁴

戦後、私は「戸田塾」で学んだ。先生は戸田先生。生徒は私一人。毎朝、十年間、万般の学問を教えていただいた。最後には「これで自分の知っていることは、全部教えた」と言われた。(1994年、創価大学第24回入学式・創価女子短期大学第10回入学式)¹⁵

十年間、私は戸田先生に毎朝、勉強を教わった。「戸田塾」ともいうべき個人教授であった。(1995年、創価中学校・高等学校第28回入学式および関西創価中学校・高等学校第23回入学式)¹⁶

そして、池田が、最初に「戸田大学」と語ったのは、1996年4月17日の創価中学校・高等学校の新入生記念撮影会における次のスピーチである。

十年間、毎朝、私は戸田先生の個人授業で万般にわたる学問を教えていただいた。いわば、「戸田大学、である」¹⁷。

それから3年後、「戸田大学」という言葉は、「随筆 新・人間革命」の「わが魂の『戸田大学』」(『聖教新聞』1999年11月26日付)で初めて随筆のタイトルになった。そして、「『戸田大学』の名講義」(同、12月7日付)、「師弟＝人間教育の真髓」(同、12月18日付)を含めた3つの随筆で、「戸田大学、について、詳しく述べられている。

なぜ池田は、1996年に「戸田大学、という言葉を使うようになったのか。そして、3年後の99年には、より具体的な話をするようになったのだろうか。

考えられることは、池田が創立した創価学園・創価大学が開校からそれぞれ四半世紀を超え、1996年6月にはアメリカ創価大学のリベラルアーツ・カレッジ(教養大学)開設計画が発表されたことである¹⁸。創価教育の学校は、さらなる飛躍の時期に入ったのである。また、開始時期は特定できないが、この頃から池田は、牧口について言及することが多くなり、小説や偉人の言説などを引用することも、以前と比べて格段に増えてきたように思われる。さらに、1991年11月に創価学会と日蓮正宗との関係が断ち切れ¹⁹、創価学会はそれを「魂の独立、と宣言した。彼

¹⁴ 『池田全集・第82巻』、251頁。

¹⁵ 『池田全集・第60巻』、302頁。あわせて、『池田全集・第134巻』の372頁を参照。

¹⁶ 『池田全集・第57巻』、296頁。

¹⁷ 『池田全集・第58巻』、27頁。

¹⁸ 『聖教新聞』1996年6月4日付1面参照。

¹⁹ 1991年11月に日蓮正宗が「創価学会破門通告書」を送付してきたこと(『聖教新聞』1991年11月30日付1面参照)。日蓮正宗は、日蓮の弟子日興が開基した大石寺を総本山とする宗派。1900年に日蓮宗富士派と公称し、1912年に日蓮正宗と改称した(富士年表作成委員会編『日蓮正宗富士年表』、富士学林、1981年、383・393頁参照)。

の胸中には、牧口・戸田・池田と継承されてきた「創価」の根幹をなすものと、戸田から受けてきた「人間教育」を次の世代に伝えたいとの思いが、この頃、一段と強くなってきたのではなからうか。

2. 「戸田大学、は「人間学」の天才による個人授業

池田は、戸田から受けた薫陶について、次のように記している。

私は、大世学院を辞めたが、以来、〔戸田〕²⁰先生は仏法はもとより、人文、社会、自然科学、経済をはじめ、礼儀作法²¹、情勢分析、判断の仕方、組織運営の問題など、すべてを教えてくださいました。(中略)ともあれ、戸田社長のもとで働くこと自体が教育であったといってもよい。私にとっては先生の言々句々の行動は私という人間行動の基底部にいつもあり、それは我が生命に刻印された無形の財産となっているのである。(1975年、『日本経済新聞』に連載された「私の履歴書」)²²

私は、恩師の戸田先生の個人教授で万般にわたる学問を教えてくださいました。いわば、「戸田人間大学」で学んだのです。(1997年、月刊誌『灯台』に連載された「21世紀の教育と人間を語る」)²³

私の青春時代の学校は、戸田城聖という「人間学」の天才の個人授業であった。政治、経済、法律、漢文、化学、物理学……古今の百般を徹底的に教えてくださいました。つまり「戸田大学」である。(1999年、随筆「わが魂の『戸田大学』」)²⁴

私は若き日、恩師である戸田第二代会長から万般の学問と「人間学」を教えてくださいました。それ

²⁰ 以下、〔 〕内は、筆者による補足または注記。

²¹ 中央邦は、池田が話したことも交えて、次のように記している。

「池田は少年時代からハキハキ、齒に衣を着せずにものをいったが、腰は低かった、と当時を知る人はいう。それに磨きかけたのが戸田の訓育であったという。折目正しさも、徹底的に仕込まれた。

『戸田先生は、豪放ライラクで、礼儀もわきまえないような、そぶりがあった。それを真似る幹部もいたが、みんな表面しか知らなかったのだと思う。仏法に対する謙虚な態度を私はいつもそばで見ている、痛切に礼儀正しい人だということを知っていた。

性格的には、小さい時から折目正しい面もあったと思うが、戸田先生の態度から、私は礼儀というものを体得した』(『池田大作論』、大光社、1969年、71頁)

²² 池田大作「私の履歴書⑨」(『日本経済新聞』1975年2月19日付朝刊24面)。『池田全集・第22巻』の260頁に収録。なお、「私の履歴書」には「戸田大学」に関する記述はない。

²³ 「21世紀の教育と人間を語る 第9回」(『灯台』第437号、第三文明社、1997年2月)、57頁。池田大作『21世紀の教育と人間を語る』(第三文明社、1997年)の278頁に収録。

²⁴ 『池田全集・第130巻』、248～249頁。あわせて、池田大作『御書と師第1』(聖教新聞社、2010年)の120頁を参照。

が私の不滅の原点となっている。(2004年、女子部・教育本部・学術部合同研修会)²⁵

師の戸田城聖先生は、歴史上の英雄の生涯を通して、人間学、また將軍学というべきものを教えてくださるのが、常であった。(2002年、『第三文明』に連載された「私の人生記録 第三部」)²⁶

このように、戸田によって日常的に行われた池田への薫陶は、「人間としての最高の力をつける全人格的大学」²⁷であり、「人間学」の天才による個人授業といえるものであった。「戸田大学」は、単に教養書などを教材にして学ぶだけではない。御書²⁸や法華経²⁹などの研鑽を通して、戸田が悟達した仏法の極理を伝えることに主眼があったように思われる。池田は次のように記している。

様々の学問の外に、もっとも精魂こめて教えられたのは、仏法の生命哲学であった。仏典や日蓮大聖人の御書をつぶさに解説しながら、現代思想との対決において教えられたのであった。(1969年、随筆「人生に負けてはいけない」)³⁰

戸田先生はよく、もっとも高き思想のものに、最初から深く入れ、と指導されていた。「日蓮大聖人の哲学が宗教の最高峰であるがゆえに、これを窮めつくすことは、一切の学問の根底をつかむこととなるのである」とも教えられた。(1998年、「5・3」記念協議会)³¹

3. 池田大作が受けた薫陶を時期に分けて考察

2000年以降になると、池田が戸田から受けた薫陶は、池田によってたびたび随筆やスピーチの中で紹介されている。1999年の随筆では、「戸田大学」という言葉は、主に、1952年5月以降の大蔵商事³² 始業前の講義を意味していたが、その後は、より幅広く、①1947年8月の創価学会入会以降に池田が受けた全ての薫陶、②1949年1月の日本正学館入社以降に池田が受けた全ての薫陶、③1950年1月に戸田が池田に提案して始まった個人教授、という意味でも使われている。本稿では、最も広い①の捉え方に従って、池田が創価学会に入会してから戸田の逝去までを5つ

²⁵ 『池田全集・第96巻』、380頁。

²⁶ 池田大作「私の人生記録 第三部 第23回」(『第三文明』第512号、第三文明社、2002年8月)、52頁。『池田全集・第128巻』の127頁に収録。

²⁷ 『池田全集・第69巻』、472頁。

²⁸ 「御書」とは、日蓮の遺文のこと。日蓮の著作・手紙などに対する敬称。日蓮の弟子日興が、日蓮の著作を「御書」と拝して、収集・書写・講義し、大切にすることに由来する(創価学会教学部編『教学用語集』、聖教新聞社、2017年、108頁参照)。

²⁹ 妙法蓮華経のこと。大乘仏教を代表する経典(同前、315～318頁参照)。

³⁰ 前出、『人生の恩師』、23頁。

³¹ 『池田全集・第89巻』、123頁。引用されている戸田の言葉は、巻頭言「書を読むの心がまえ」(『戸田城聖全集・第1巻』、聖教新聞社、1981年)の138頁による。

³² 大蔵商事株式会社は1950年10月に設立され、戸田は最高顧問に就任。池田も同月入社した。同社については、『評伝 戸田城聖』下巻の99頁を参照。

に区切り、その区分ごとに、池田がどのような薫陶を受けてきたのかを見ていきたい。

(1) 池田の創価学会入会から日本正学館入社まで（1947年8月～49年1月）

池田は、創価学会への入会を決意し、信仰の道に入った1947年8月24日について、次のように述べている。

この時、私は、深遠な仏法の哲理を、十分に納得できたわけではない。

家族も大反対であった。ただ私は、表層の次元を超越して、戸田城聖という人格に魅了されてならなかったのである。

「体当たりで、私にぶつかってこい。

青年らしく勉強し、勇敢に実践してみたまえ！」

先生は私を信じてくださった。

私もまた、青年の直感で、「戦争中、平和のため、仏法のために投獄された、この人にはついていける」と確信したのであった。

その意味において、8月24日は、まさしく「戸田大学」への入学の日であった。（2002年、随筆「不二の旅立ち『8・24』①」）³³

この頃の創価学会の主な会合は、千代田区西神田の本部で行われていた戸田による法華経講義と御書講義であった。あとは、各支部が月1回程度開催する座談会である³⁴。入会した池田は、1947年秋から戸田の講義を聴講し³⁵、48年9月13日からは法華経講義の第7期生として、毎週月曜・水曜・金曜の3回、5カ月間かかさず受講した（翌49年2月5日に終講）³⁶。池田は、講義から受けた感動を次のように記している。

ああ、甚深無量なる、法華経の玄理に、遭いし身の福運を知る。

戸田先生こそ、人類の師であらん。

（中略）

妙法の徒。吾が行動に恥なきや。吾れ、心奥に迷いなきや。信ずる者も、汝自身なり。祖国を救うのも、汝自身なり。

³³ 『池田全集・第133巻』、125頁。あわせて、『池田全集・第18巻』の157頁を参照。

³⁴ 『価値創造』第1号（創価学会、1946年6月）、6～8頁参照。

³⁵ 池田は、1960年1月12日の日記に「昭和二十二年秋より、ひとり決意して、戸田城聖先生の講義を神田にてうく。真剣なりし。この師のもとならばと、決意一段と固まる」（『池田全集・第37巻』、503頁）と記している。あわせて、『池田全集・第22巻』の88頁、『価値創造』第11号（創価学会、1947年11月）の8頁、『価値創造』第16号・第3回総会特輯号（1948年11月）の16頁、などを参照。

³⁶ 「法華経講義修了者名簿」、池田大作「戸田先生 法華経講義の感想」（『大白蓮華』第167号、創価学会、1965年4月）の30～33頁、『池田全集・第133巻』の127頁、などを参照。

宗教革命、即、人間革命なり。かくして、教育革命、経済革命あり、政治革命とならん。

(中略)

吾れ、二十台にして、最高に栄光ある青春の生きゆく道を知る。(1948年9月13日の手記)³⁷

戸田の法華経講義は、經典の訓詁注釈ではなかった。獄中における悟達に基づいた、受講者一人一人の生き方の変革(人間革命)を促すもので、その感動は、池田の全身を貫くものとなった。

(2) 池田の日本正学館入社から少年雑誌休刊まで(1949年1月～49年12月)

池田は、1949年1月に、戸田が経営する日本正学館に入社。月刊少年雑誌『冒険少年』の編集を担当し、それまで戸田が行ってきた作家や画家への原稿依頼や受け取りなども担うことになった。多忙な作家や画家たちから執筆の了解をもらうことや締め切りまでに原稿・画稿を受け取るとは、何かと気苦労が多い。作家や画家たちとの人間関係が大事になる。それを、21歳の池田に託したのである。そして、入社半年後には、池田を編集長に抜擢している³⁸。

池田は、入社以降に受けた薫陶を次のように記している。

思えば、私が戸田先生の会社に勤めたのは、昭和24(1949)年1月3日からだった。満21歳の誕生日を迎えたばかりである。それからの十年間というもの、先生の訓練は厳しかった。毎日のように私に対する薫陶は続いた。

毎朝、仕事の前には先生じきじきの個人教授がなされた。『御書』を拝しての指導は当然として、人文・自然・社会科学など万般にわたる勉強だった。(1992年、月刊誌『第三文明』に連載された「続・若き日の読書」)³⁹

恩師の出版社で初めて任された仕事が、『冒険少年』(のち『少年日本』と改題)という少年雑誌の編集でした。21歳のときです。

プランから原稿依頼、編集作業から校正まで、一人でやりました。予定していた原稿が間に合わず、雑誌に「穴」があきそうなときは、自分で書きました。要するに必要に迫られたわけですが、本格的に文章に取り組みはじめたのは、このときです。また当時、戸田先生に厳しく文章を鍛えていただいた経験は、私の生涯の財産です。(1998年、金庸との対談『旭日の世紀を求めて』)⁴⁰

³⁷ 前出、「戸田先生 法華経講義の感想」、31頁。掲載されている感想は、①法華経講義第7期が開講された1948年9月13日、②48年12月末日、③第7期の「卒業式」が行われた49年2月11日の3日分。

³⁸ 『評伝 戸田城聖』下巻の59～63頁、池田大作『御書と青年』(聖教新聞社、2012年)の31～32頁、『池田全集・第73巻』の16～17頁、などを参照。

³⁹ 池田大作「続・若き日の読書 第1回」(『第三文明』第369号、第三文明社、1992年1月)、11頁。『池田全集・第23巻』の251頁に収録。

⁴⁰ 金庸／池田大作『旭日の世紀を求めて』(潮出版社、1998年)、128～129頁。

この時期池田は、雑誌編集を通して戸田から薫陶を受けている⁴¹。なお、たびたび池田は、十年間毎朝、戸田から教えてもらったと述べているが⁴²、戸田の逝去（1958年4月）から逆算すると、1949年1月の日本正学館入社の中から始業前の教育が行われていたことになる。しかし、「約十年の間、毎朝」「十年近くにわたって、毎朝のように」という表現があることと、以下述べる始業前の講義が始まった経緯から、朝に講義が行われるようになるのは、1950年1月以降ではないかと考えられる。

(3) 戸田が経営する東京建設信用組合⁴³の業務開始から停止まで（1950年1月～50年8月）

1949年12月、池田が編集長をしていた『少年日本』が休刊になり、残っていた社員は、同じ建物で営業を始める東京建設信用組合で働くことになった。しかし、1949年3月から始まった金融引き締め政策（いわゆる「ドッジ・ライン」）によって、多くの中小事業者が倒産する中で、開業は、相当の困難が予想されていた。1950年の正月、戸田は、そのことを池田に説明し、「仕事も忙しくなるので、ついては夜学の方も断念してもらえぬか。そのかわり、私が責任もって個人教授しよう」と話している⁴⁴。

池田は、大世学院に通うことを断念する。そして、戸田を支えることに専念した。一方戸田は、池田との約束を守り、休日を使って個人教授を開始。さらに、始業前にも時間を取るようになり、1950年には池田に対し五大部⁴⁵と呼ばれる重要御書の講義を行っている⁴⁶。池田は次のように語っている。

私自身、ほとんどの教育を、私の人生の師・戸田城聖の個人教授から受けました。

約十年の間、毎朝、そして、日曜日は朝から一日中、個人教授を恩師から一対一で、歴史、文学、哲学、経済、科学、組織論等々、万般にわたって受けたのであります。（1996年、コロンビア大学での講演）⁴⁷

⁴¹ 『池田全集・第18巻』の107～108頁、『池田全集・第98巻』の404頁、『池田全集・第126巻』の196・389・484頁、『池田全集・第135巻』の28～29頁、などを参照。

⁴² たとえば、学生部結成の日首都圏記念大会へのメッセージでも、「君たちは通常、4年間の大学時代である。私は、10年間の戸田大学の学生であった」（『聖教新聞』2006年7月1日付1面）と記している。

⁴³ 東京建設信用組合の淵源は、1921年4月28日に設立された「城東建築信用購買利用組合」。その後一度名称変更があり、1949年1月頃に再度「東京建設信用購買利用組合」へ変更された後、専務理事になった戸田によって「東京建設信用組合」に改組された（『評伝 戸田城聖』下巻、91・108～109・444頁参照）。

⁴⁴ 前出、「私の履歴書⑨」参照。あわせて、『池田全集・第59巻』の296～297頁を参照。

⁴⁵ 「五大部」は、日蓮の遺文の中で特に重要とされる「立正安国論」「開目抄」「如来滅後五五百歳始観心本尊抄」「撰時抄」「報恩抄」のこと（前出、『教学用語集』、110頁参照）。

⁴⁶ 座談会「池田会長に聞く学会伝統の『実践の教学』」（『聖教新聞』1962年10月18日付）の4面、『聖教新聞』1952年3月10日付2面、『池田全集・第130巻』の262頁、などを参照。池田は、「〔戸田〕先生は、第二代会長に就任される前、事業が窮地にあったころから、生命を削るようにして、私に御書を教えてくださいました」（『池田全集・第130巻』、284頁）と記している。

⁴⁷ 『池田全集・第101巻』、427頁。

私は、若き日、十年近くにわたって、毎朝のように、戸田先生の個人教授を受けました。(1999年、
韓国・清道郡「^{チョンド}名誉郡民証」授与式)⁴⁸

また、1950年春頃から51年4月頃にかけて、幹部数十人に対して「御義口伝」⁴⁹の講義が行われている。池田は「師のもとで、私が教学を学び始めた時、まず『御義口伝』から入ったのである」⁵⁰と述べている。参加対象でなかった彼も、聴講していた⁵¹。

(4) 東京建設信用組合の業務停止に伴う戸田の創価学会理事長辞任から会長就任まで（1950年8月～51年5月）

戸田は、東京建設信用組合の経営状態が悪化したため、窮余の一策として、大蔵省に他の組合との合併の斡旋を申請した。ところが、意に反して1950年8月22日に同省から届いたのは、業務を停止せよとの通達であった（翌日から業務停止）⁵²。彼は、創価学会の会員に動揺が及ぶことを危惧し、8月24日に同会理事長を辞任する。

同年11月から戸田は、最悪の事態（東京建設信用組合の専務理事である彼が、経営責任を問われて刑事告発されること）も想定して⁵³、池田を含む信頼する7人に対し、1950年秋から日曜日に御書などの講義を行うようになった（51年春まで）⁵⁴。さらに戸田は、1950年11月にホオ

⁴⁸ 『池田全集・第90巻』、236頁。

⁴⁹ 「御義口伝」は、日蓮が身延（現在の山梨県南部）で行った法華経要文の講義を弟子の日興が筆録したものと伝えられている（前出、『教学用語集』、40頁参照）。

⁵⁰ 『池田全集・第132巻』、278頁。

⁵¹ 池田は、研究座談会「教学を身につけよう」の中で、「あの時の御義口伝受講者数十名のうちに、私は入っていなかったのですよ、まだ。入っていないけれども、聴きに行っちゃえていって、聴いたのですよ」と語っている（『大白蓮華』第55号、創価学会、1955年12月、38頁参照）。あわせて、『池田全集・第36巻』の58・125・219・231・246頁、『聖教新聞』1951年5月1日付1面の記事「支部改廃成る」、などを参照。池田は、1950年5月17日には「方便品八箇の大事」の「第三唯以一大事因縁の事」、1951年3月2日には「信解品六箇の大事」の「第六世尊大恩の事」、同年3月23日には葉草喩品等の講義に出席したと日記に書いている。

⁵² 池田は、「[1950年]8月の業務停止から間もなく、給料は遅配から半額支払いになり、やがて無配となっていった」（前出、「私の履歴書⑨」）と記している。

⁵³ 『池田全集・第100巻』、300頁参照。

⁵⁴ 『池田全集・第36巻』の156～157・187～188・200～201頁、『池田全集・第134巻』の134～135頁、前出の『大白蓮華』第55号の37頁、戸田のもとで女子部長・秘書などを務めた山浦千鶴子の手記と聞き取り、などによる。戸田は、「三重秘伝抄」「草木成仏口決」「一生成仏抄」「生死一大事血脈抄」「三世諸仏総勘文教相廢立」「当体義抄」「松野殿御返事」「総在一念抄」などを講義した。池田は、「師は日曜日になると、ご自宅で個人教授をしてくださっていた。『戸田大学』である。秋からの御書の講義も、その講座の一つとなったのである」（『池田全集・第134巻』、134頁）と述べている。

ル・ケエン『永遠の都』⁵⁵、同年12月にユーゴー『九十三年』⁵⁶を池田に渡し、読むように言っている⁵⁷。

翌1951年2月、戸田は、信用組合の整理がまだまだ予断を許さない中、池田が推薦した青年男子⁵⁸14人に、『永遠の都』を回し読みさせ、感想発表会をもっている。その後、彼らに対し、御書講義を行うようになった⁵⁹。また、青年女子15人に対しても、同じ頃から、『永遠の都』・『九十三年』・太宰治『走れメロス』などを教材に、読書会を始めている⁶⁰。

このように、この頃の戸田の池田への薫陶は、個人教授だけではなく、何人かと一緒に行うことで、同じ心で行動できるグループを作ろうとしている。この方式は、その後の水滸会や華陽会に引き継がれた⁶¹。

(5) 戸田の創価学会会長就任から逝去まで（1951年5月～58年4月）

a. 1951年5月頃から52年4月まで始業前の講義を池田一人に対して行う

1951年5月頃から、戸田の池田に対する始業前の講義の教材が、御書から教養書に変わったようである。池田へのインタビューを行った草柳大蔵は、戸田から受けた個人教授の教材だと聞

⁵⁵ 戸田が池田に渡したのは、ホオル・ケエン著／戸川秋骨訳『永遠の都』（世界大衆文学全集・第39巻、改造社、1930年）。同書については、『池田全集・第57巻』の296頁、『池田全集・第78巻』の153～158頁、『池田全集・第81巻』の50～52頁、『池田全集・第89巻』の140～141頁、『池田全集・第131巻』の106～109頁、などを参照。

⁵⁶ 戸田が池田に渡したのは、ユーゴー著／早坂二郎訳『九十三年』（世界大衆文学全集・第17巻、改造社、1928年）。

⁵⁷ 『池田全集・第22巻』の92～93頁、および、池田の旧蔵図書の書き込みによる。池田は、『永遠の都』に、「恩師戸田先生ヨリ戴く 永遠ノ弟子ノ書也 昭和二十五年十一月三日 池田大作」「昭和二十五年十二月一日 読了決意新た也」と。『九十三年』には、「昭和二十五年十二月 恩師戸田先生ヨリ 給わりし本也」と記している。池田は、1951年1月13日の日記に、「革命の大叙事詩、小説家ヴィクトル・ユゴーの『九十三年』完読。感多し」（『池田全集・第36巻』、186頁）とつづっている。なお、戸田は、51年5月3日の会長就任の日にも、池田に『九十三年』を手渡している。あわせて、『池田全集・第60巻』の423頁を参照。

⁵⁸ 戸田の会長就任前には、男子青年部、女子青年部という区別はなかった。1951年5月に男子部長・女子部長が任命され、同年7月に両部が結成された。

⁵⁹ 『池田全集・第131巻』、106～107頁参照。戸田は、「三大秘法稟承事」「諸法実相抄」「四信五品抄」「佐渡御書」などを講義した（『池田全集・第36巻』の211～212・218・224・254・275頁、および、前出の『大白蓮華』第55号の37頁を参照）。

⁶⁰ 『評伝 戸田城聖』下巻、142～143頁の注(16)参照。

⁶¹ 「水滸会」と「華陽会」については、本節の(5)c.で詳述。

いた 21 冊の書名を挙げている⁶²。そのうち、以下の 6 冊はこの時期に使われたのではないかと推測される。

尾高朝雄『法学概論』、国家学会『新憲法の研究』、林信雄『日本労働法』、太田哲三『会計学』、高田保馬『社会学概論』、一柳寿一『地学概論』

そのほかに、和田小次郎『法学原論』が使われたと考えられる⁶³。

b. 1952 年 5 月からの大蔵商事の始業前講義に他の社員も同席して行う

戸田が会長に就任した翌年、大蔵商事に青年男子数人が採用される。それまで池田一人に対して行ってきた始業前の講義に、1952 年 5 月 8 日から、彼らも参加することになった⁶⁴。この講義で使われた主な教材は、以下の通り⁶⁵。

波多野鼎『経済学入門』、林信雄『法学概論』、F・S・テラー著／白井俊明他訳の『化学』⁶⁶『地球と天体』⁶⁷『生命』、小沢栄一他編『資料日本史』⁶⁸、矢田俊隆『世界史』、中西清他編『改訂高等漢文』巻二⁶⁹、

⁶² 草柳大蔵『実力者の条件』（文藝春秋、1970 年）の 224～225 頁などを参照。初出は、草柳大蔵「手づくり人間、池田大作」（『文藝春秋』第 47 巻第 10 号、文藝春秋、1969 年 9 月）の 166～167 頁。草柳は、「矢田俊隆『世界史』、熊谷幸次郎〔等編〕『日本史一概説と問題点』、尾高朝雄『法学概論』、鶴飼信成『憲法』、国家学会〔編〕『新憲法の研究』、ジョン・ゴラン『イギリスの政治制度』、林信雄『日本労働法』、鈴木安蔵『政治学』、高田保馬『経済学原理』、波多野鼎『経済学入門』、太田哲三『会計学』、高田保馬『社会学概論』、一柳寿一『地学概論』、青野寿郎『人文地理〔学〕研究』、白井俊明〔訳／テラー著〕「新科学大系」に収録されている『物質〔のすがた〕』・『動力〕〔上・下〕』・『波』・『化学』・『生命』・『地球と天体』、それに副読本としてガモフ全集（前出、『実力者の条件』の 224～225 頁による）と記している。〔 〕内は、筆者による補足。ガモフ全集については、『池田全集・第 91 巻』の 82 頁および『池田全集・第 133 巻』の 343 頁を参照。

⁶³ 創価大学中央図書館の池田文庫所蔵の和田小次郎『法学原論』（啓文館、1948 年）には、「六月二十三日」と「七月七日」の書き込みがある。このことと、大蔵商事の元社員がまとめた記録、および、池田大作『若き日の日記』（『池田全集・第 36 巻』に収録）などを参照して、『法学原論』は、1951 年の 6 月頃から 7 月頃に、池田への朝の講義で使われたものではないかと推定される。

⁶⁴ 『池田全集・第 130 巻』、262 頁参照。

⁶⁵ 池田とともに大蔵商事の始業前の講義を受講した元社員有志がまとめた「戸田先生の『早朝講義』の記録」による。それぞれの教材が使われた時期については、『評伝 戸田城聖』下巻の 242～244 頁注(22)を参照。書名は、教材となった順に掲載。

⁶⁶ 『池田全集・第 134 巻』、154～155 頁参照。

⁶⁷ 『池田全集・第 130 巻』、270～273 頁参照。戸田は、「これからは天文学の教育に力を入れるべきである。学校でも社会でも天文学を学ぶことで、平和を愛する心を培うことができるのだ」と語っていたという（『池田全集・第 133 巻』、343 頁参照）。

⁶⁸ 『池田全集・第 134 巻』、55～56 頁参照。

⁶⁹ 『池田全集・第 90 巻』の 266～267 頁、『池田全集・第 91 巻』の 290～293 頁、『池田全集・第 130 巻』の 249～251・357～358 頁、『池田全集・第 131 巻』の 454 頁、などを参照。

鈴木安蔵『政治学』⁷⁰、「依義判文抄第三」⁷¹

大蔵商事の元社員がまとめた記録などによれば、始業前の講義（午前8時30分から9時まで）⁷²は、その後、戸田の健康上の理由で中断。1957年9月頃、戸田は、再開したいと言っていたが、実際に再開できたかどうかは明らかではない。なお、同記録には、55年11月14日に始まった「依義判文抄」以降の教材については記されていない⁷³。

c. 1952年12月に男子青年部の代表で結成された水滸会

水滸会は、1951年7月の男子青年部結成後、今後の創価学会を担う青年男子を育成するために52年12月に発足した。途中から池田が実質的な幹事役になり、月1、2回開催された。教材となった小説⁷⁴は、以下の通り。そのほかに、時事問題などがテーマになることもあった⁷⁵。

佐藤春夫訳『新訳水滸伝』⁷⁶、アレクサンドル・デュマ『モンテ・クリスト伯』⁷⁷、尾崎士郎『風霜』⁷⁸
 （後に『高杉晋作』と改題）、村松梢風『風と波と』⁷⁹、ヴィクトル・ユゴー『九十三年』⁸⁰、ダニエル・

⁷⁰ 池田は、「『戸田大学』の政治学の授業で、恩師は、かのプラトンの『哲人政治』の理想についても熱く語ってくれました」（『池田全集・第90巻』、236～237頁）と述べている。

⁷¹ 「依義判文抄第三」は、大石寺の26世日寛（1665～1726年）の6つの論考を集めた「六卷抄」の一つ。当時創価学会では、同抄のほか、「三重秘伝抄第一」「文底秘沈抄第二」「末法相应抄第四」「当流行事抄第五」を学んでいた。

⁷² 講義の時間帯は、受講者の一人である吉田顕之助の手記による（『評伝 戸田城聖』下巻、220頁参照）。

⁷³ 大蔵商事の元社員がまとめた記録、「全国最高協議会での名誉会長のスピーチ②」（『聖教新聞』2007年8月9日付）の3面、池田大作『希望の経典「御書」に学ぶ 1』（聖教新聞社、2011年）の35頁、などを参照。なお戸田は、1956年9月5日に大蔵商事からの引退を宣言している（『池田全集・第37巻』、71頁参照）。その後も、同社に出勤していたかどうかは不明。

⁷⁴ 池田は、「戸田先生は、よく私ども青年に『偉大な世界的小説を読み。徹底して勉強せよ』と厳しく指導された。『御書の拝読は当然として、そのうえで、人類の偉大な思想的遺産は、みな仏法に通じ、仏法を証明しゆく糧となる』とも言われていた」（『池田全集・第70巻』、257頁）と記している。

⁷⁵ 2020年に行った秋谷栄之助からの聞き取りなどによる。書名は、教材となった順に掲載。なお、秋谷によれば、教材は水滸会の出席者が選んだとのことである。秋谷は、創価学会第5代会長。戸田のもとで、男子部長などを務めた。

⁷⁶ 『池田全集・第16巻』の406～407頁、『池田全集・第87巻』の299頁、王蒙／池田大作『未来に贈る人生哲学 文学と人間を見つめて』（潮出版社、2017年）の235・247～250頁、などを参照。

⁷⁷ 『池田全集・第16巻』の201～204頁、『池田全集・第23巻』の154～164頁、『池田全集・第72巻』の149頁、『池田全集・第86巻』の258～260頁、『池田全集・第90巻』の232～233頁、『池田全集・第92巻』、228～232頁、『池田全集・第119巻』の112～113頁、『池田全集・第133巻』の75～77頁、『池田全集・第135巻』の476頁、などを参照。

⁷⁸ 『池田全集・第23巻』、117～123頁参照。

⁷⁹ 『池田全集・第139巻』、199頁参照。

⁸⁰ 池田大作『人間と文学を語る ロマン派の詩人ヴィクトル・ユゴーの世界』（潮出版社、1991年）の84頁、『池田全集・第23巻』の237・240～243・246頁、『池田全集・第76巻』の402～403頁、『池田全集・第78巻』の210～211頁、『池田全集・第127巻』の247・250頁、『池田全集・第137巻』の90～91頁、などを参照。

デフォー『ロビンソン・クルーソー』⁸¹、ニコライ・ゴーゴリ『隊長ブーリバ』⁸²、ヘンリク・イブセン『人形の家』⁸³、吉川英治『三国志』⁸⁴、吉川英治『新書太閤記』

水滸伝と三国志は、戸田が十代の頃から親しんできた長編小説⁸⁵。中国を舞台に多くの人物が描かれている。水滸会では、上記の教材をもとに人物論などについて意見を交わし、その後戸田が講評を加えている⁸⁶。

なお、水滸会と並行して女子青年部の代表で華陽会が結成されている。1952年10月に20名の女子青年部員で結成された同会は、水滸会と同じく戸田が出席して月1、2回開催。以下の小説が、教材になった⁸⁷。

チャールズ・ディケンズ『二都物語』、ハリエット・ピーチャー・ストウ『アンクル・トムス・ケビン』、マーク・トウェイン『トム・ソーヤの冒険』、尾崎士郎『風霜』、ラファエル・サバチニ『スカラムーシュ』、夏目漱石『坊っちゃん』、フランシス・ホジソン・バーネット『小公子』⁸⁸、ヘンリク・イブセン『人形の家』、ニコライ・ゴーゴリ『隊長ブーリバ』、趙樹里『結婚登記』、趙樹里『家宝』、トマス・ハーディ『テス』、吉川英治『三国志』、坂口安吾『信長』、エドワード・ブルワー・リットン『ボンベイ最後の日』、ルイーザ・メイ・オルコット『若草物語』⁸⁹

⁸¹ 『池田全集・第23巻』、169～173頁参照。

⁸² 『池田全集・第23巻』の318～319・325～329頁、『池田全集・第71巻』の225頁、『池田全集・第91巻』の412・430頁、などを参照。

⁸³ 『池田全集・第23巻』の420～421頁、『池田全集・第87巻』の26頁、『池田全集・第119巻』の419頁、J・U＝サイフェルト／池田大作『生命の光 母の歌』（聖教新聞社、2015年）の154～156頁、などを参照。

⁸⁴ 戸田は、青年たちに「『三国志』は、人間指導者の最良の教科書であると思って学びたまえ」と語っていたという（『池田全集・第137巻』、339頁参照）。そのほか、『池田全集・第16巻』の268・273・278～279頁、『池田全集・第23巻』の135～142頁、『池田全集・第60巻』の334頁、『池田全集・第95巻』の39・49頁、『池田全集・第97巻』の213・406～408頁、『池田全集・第99巻』の65～67頁、『池田全集・第100巻』の105～106・344頁、『池田全集・第119巻』の266～267・285・304～305頁、『池田全集・第134巻』の141頁、『池田全集・第138巻』の395～396頁、『池田全集・第139巻』の140～141頁、前出の『旭日の世紀を求めて』の414頁、前出の『未来に贈る人生哲学』の208・217頁、などを参照。

⁸⁵ 『評伝 戸田城聖』上巻、48頁参照。

⁸⁶ 『評伝 戸田城聖』下巻、225～228頁参照。

⁸⁷ 華陽会の会員が作成した『華陽会集録』（1959年作成）などによる。書名は、教材となった順に掲載。

⁸⁸ 『池田全集・第98巻』、391～392頁参照。

⁸⁹ 『池田全集・第100巻』の145頁、および、サーラ・ワイダー／池田大作『母への讃歌 詩心と女性の時代を語る』（潮出版社、2013年）の117～118頁を参照。

4. 戸田による日々の薫陶

(1) 寸暇を惜しんでの薫陶

戸田は、時間を惜しんで、池田を育てようとした。池田は、「先生にお供して移動する際も、飛行機の中でも、車の中でも、あらゆるところが『戸田大学』の校舎になった」⁹⁰、「私はよく先生とともに旅をした。飛行機の中でも、電車の中でも、次々と質問が飛んできた。先生は、そうして私を鍛えてくださった」⁹¹と述べている。さらに、次のようにも語っている。

車中、戸田先生は、お疲れでありながら、休みもせず、あらゆる角度から、哲学の話、世界の指導者の話、牧口先生の話、そして、これからの学会の前途に対する諸注意等々、それこそ息つく暇もなく語ってくださった⁹²。

戸田先生と出会ってからは、それこそ、毎日のように、「今日は何を読んだか」「何が書いてあったか」と聞かれ、心も頭も鍛えていただきました。

恩師は、口癖のように言われていました。

「仏法を信じているからといって、独善的になってはならない。あらゆる学問、あらゆる文学、あらゆる一流の思想家たちの持論・論調を真摯に勉強することが大事である。それによって、さらに仏法も理解できる」と⁹³。

「大作、今日は何を読んだ」と、何度も何度も、いつもいつも聞かれた。厳しかった。鋭かった。怖かった。

師をお護りし抜く、激しい戦いの渦中である。もとより、読書に専念する時間はない。

師とお会いする時は、何を讀んだか、そこから何を得たのかを答えることが、苦痛でさえあった⁹⁴。

このような池田への薫陶は、戸田が逝去する前月の1958年3月まで続いた⁹⁵。

(2) 書物や歴史上の人物を通した語り合い

池田の随筆やスピーチには、戸田と書物を通して語り合った話がたびたび出てくる。池田は、

⁹⁰ 『聖教新聞』2006年8月26日付3面。あわせて、前出の『御書と師弟 1』の31頁、『池田全集・第30巻』の281・400頁、『池田全集・第132巻』の204～206・213頁、などを参照。

⁹¹ 『池田全集・第96巻』、381頁。

⁹² 『池田全集・第135巻』、231頁。

⁹³ ミハイル・ズグロフスキー／池田大作『平和の朝へ 教育の大光一ウクライナと日本の友情』（第三文明社、2011年）、60～61頁。あわせて、『池田全集・第131巻』の105～106頁を参照。

⁹⁴ 『池田全集・第138巻』、210～211頁。

⁹⁵ 『池田全集・第99巻』、26～27頁参照。

次のように語っている。

教育者でもあった牧口先生、戸田先生は、『エミール』をはじめ、ルソーの書を愛読されていた。私も、戸田先生と、幾度となく『エミール』について語りあった。

昭和 25 年のことであつたと思う。戸田先生と小岩のあるお宅を訪れた。その帰路、小岩駅前でおすしを御馳走になり、帰りの車中で『エミール』や文学について、種々、語りあった。そして、目黒駅まで先生をお送りしたことを懐かしく思い起こす⁹⁶。

私が青春時代に読んだ本は、なぜかトルストイが多かった。たまたま、戸田先生から「今日は、トルストイの何を讀んでいるのか」と、車中で聞かれた時は嬉しかった。

その時、お答えしたのがトルストイの『読書の輪』であつた。(中略)先生は笑顔で頷いてくださった⁹⁷。

戸田と池田の間で話題になった主な書物や人物（大蔵商事の始業前の講義と水滸会の教材および『永遠の都』を除く）は以下の通り。

ルソー『エミール』、ラファエル・サバチニ『スカラムーシュ』⁹⁸、ハイネ『ドイツ・冬物語』⁹⁹、ユゴー『レ・ミゼラブル』¹⁰⁰、ダンテ『神曲』¹⁰¹、ヒルティ『幸福論』¹⁰²、『十八史略』¹⁰³、『史記』¹⁰⁴、吉川英治『新・平家物語』¹⁰⁵、吉川英治『黒田如水』¹⁰⁶のほか、エマーソン¹⁰⁷、シラー¹⁰⁸、ショーペンハ

⁹⁶ 『池田全集・第 68 卷』、113 頁。『エミール』については、1950 年 10 月 2 日の日記（『池田全集・第 36 卷』の 129～130 頁に収録）、『池田全集・第 23 卷』の 144・153 頁、『池田全集・第 69 卷』の 466～467 頁、『池田全集・第 87 卷』の 405～406 頁、『池田全集・第 138 卷』、415～417 頁、なども参照。

⁹⁷ 『池田全集・第 136 卷』、251 頁。

⁹⁸ 『池田全集・第 23 卷』の 177 頁、および、『池田全集・第 72 卷』の 260 頁を参照。

⁹⁹ 『池田全集・第 86 卷』、163 頁参照。

¹⁰⁰ 『池田全集・第 23 卷』の 130 頁、『池田全集・第 78 卷』の 210～211 頁、『池田全集・第 143 卷』の 315 頁、前出の『旭日の世紀を求めて』の 382 頁、シャルル・ナポレオン／池田大作『21 世紀のナポレオン 歴史創造のエスプリ（精神）を語る』（第三文明社、2011 年）の 284 頁、などを参照。

¹⁰¹ 『池田全集・第 100 卷』、162～163 頁参照。

¹⁰² 『池田全集・第 135 卷』の 73～74 頁、および、『池田全集・第 137 卷』の 151 頁を参照。

¹⁰³ 『池田全集・第 23 卷』の 251 頁、『池田全集・第 69 卷』の 396 頁、『池田全集・第 75 卷』の 150 頁、『池田全集・第 100 卷』の 333～334 頁、『池田全集・第 137 卷』の 132 頁、顧明遠／池田大作『平和の架け橋 人間教育を語る』（東洋哲学研究所、2012 年）の 75～76 頁、などを参照。

¹⁰⁴ 『池田全集・第 23 卷』、251 頁参照。

¹⁰⁵ 『池田全集・第 68 卷』、191 頁参照。

¹⁰⁶ 『池田全集・第 137 卷』、390 頁参照。

¹⁰⁷ 『池田全集・第 23 卷』の 392 頁、『池田全集・第 86 卷』の 296 頁、『池田全集・第 90 卷』の 268 頁、『池田全集・第 100 卷』の 183 頁、などを参照。

¹⁰⁸ 『池田全集・第 98 卷』、403 頁参照。

ウアー¹⁰⁹、ソクラテス¹¹⁰、ツバイク¹¹¹、ディケンズ¹¹²、トルストイ¹¹³、ヒルティ¹¹⁴、ペスタロッチ¹¹⁵、モンテスキュー¹¹⁶、ルソー¹¹⁷、孫子¹¹⁸、杜甫¹¹⁹、山本周五郎¹²⁰、などの作品、アインシュタイン¹²¹、ゲルトヴィイ、コル¹²²、タゴール¹²³、ダ・ビンチ¹²⁴、ナポレオン¹²⁵、ネルー¹²⁶、ベルジャエフ¹²⁷、ホイットマン¹²⁸、カーライル¹²⁹、ゲーテ¹³⁰、ディズレーリ¹³¹、プラトン¹³²、ベルグソン¹³³、ユゴー¹³⁴、周恩来¹³⁵、諸葛孔明¹³⁶、孫文¹³⁷、田中正造¹³⁸、北里柴三郎¹³⁹、高山樗牛¹⁴⁰、吉田松陰、高杉晋作¹⁴¹の人物についてなど

- ¹⁰⁹ 『池田全集・第67巻』、226頁参照。
- ¹¹⁰ 『池田全集・第136巻』、67頁参照。
- ¹¹¹ 『池田全集・第138巻』、214～215頁参照。
- ¹¹² 前出、『未来に贈る人生哲学』、168頁。
- ¹¹³ 『池田全集・第97巻』の351～352頁、『池田全集・第131巻』の209～211頁、『池田全集・第143巻』の137頁、などを参照。
- ¹¹⁴ 『池田全集・第135巻』、73頁参照。
- ¹¹⁵ 『池田全集・第94巻』、467頁参照。
- ¹¹⁶ 『池田全集・第138巻』、220頁参照。
- ¹¹⁷ 『池田全集・第23巻』の278～279頁、『池田全集・第92巻』の413頁、『池田全集・第94巻』の281頁、などを参照。
- ¹¹⁸ 『聖教新聞』2006年8月26日付3面参照。
- ¹¹⁹ 『池田全集・第134巻』、447～448頁参照。
- ¹²⁰ 『池田全集・第85巻』、422頁参照。
- ¹²¹ 『池田全集・第21巻』の124～125・133頁、『池田全集・第57巻』の163頁、『池田全集・第72巻』の549頁、『池田全集・第138巻』の193頁、などを参照。
- ¹²² ゲルトヴィイとコルについては、ハンス・ヘニングセン／池田大作『明日をつくる`教育の聖業。一デンマークと日本 友情の語らい一』（潮出版社、2009年）の16頁を参照。
- ¹²³ 『聖教新聞』2006年5月30日付3面参照。
- ¹²⁴ 『池田全集・第131巻』、213～215頁参照。
- ¹²⁵ 『池田全集・第128巻』、127～128頁参照。
- ¹²⁶ 『池田全集・第57巻』の270頁、『池田全集・第79巻』の463頁、『池田全集・第88巻』の64～65頁、『池田全集・第130巻』の241～242頁、などを参照。
- ¹²⁷ 『池田全集・第131巻』、207頁参照。
- ¹²⁸ 『池田全集・第130巻』の252～253頁、『池田全集・第138巻』の277頁、前出の『母への讃歌』の306頁、などを参照。
- ¹²⁹ 『池田全集・第138巻』、222頁参照。
- ¹³⁰ 『池田全集・第132巻』の213頁、および、『池田全集・第138巻』の225頁を参照。
- ¹³¹ 『池田全集・第136巻』、401頁参照。
- ¹³² 『池田全集・第133巻』、61頁参照。
- ¹³³ 『池田全集・第132巻』、205頁参照。
- ¹³⁴ 『池田全集・第132巻』の205頁、および、『池田全集・第136巻』の74～83頁を参照。
- ¹³⁵ 『池田全集・第88巻』、64～65頁参照。
- ¹³⁶ 『池田全集・第90巻』の298頁、および、『池田全集・第100巻』の105～106頁を参照。
- ¹³⁷ 『池田全集・第135巻』、202頁参照。
- ¹³⁸ 『池田全集・第88巻』、287頁参照。
- ¹³⁹ 『池田全集・第73巻』、498頁参照。
- ¹⁴⁰ 『池田全集・第23巻』、87頁参照。
- ¹⁴¹ 吉田松陰と高杉晋作については、『池田全集・第60巻』の416頁、『池田全集・第62巻』の326頁、『池田全集・第85巻』の170頁、『池田全集・第132巻』の251頁、『池田全集・第138巻』の122・334～341・343～349頁、『池田全集・第139巻』の101頁、などを参照。

戸田の池田への個人教授は、一方的な知識の伝達ではなく、対話によって学び合う知恵の啓発であった¹⁴²。池田は、次のように記している。

恩師は「君は若いのだから、学んだことを私に話せ。知っていることは何でも話さない」と言われていた。現代は情報戦である。社会の情勢、新しい知識に鋭敏でなければ指導者として失格である、とのお心であろう。「話さない者は、敵だよ」とまで厳しく言われていた。

ゆえに私も必死であった。日々の新聞はもとより、さまざまな分野の書物をむさぼるように読んでは、学んだこと、感じたことを、そのつど、先生にお話したものである¹⁴³。

1953年頃の池田について、曾根原敏夫が次のように記している。当時池田は、男子青年部第一部隊長。

当時、私は男子部班長¹⁴⁴として活動していました。先生〔＝池田〕が会合などで、毎回のように激励されていた内容は、歴史、科学、小説、詩、哲学など、社会全般にわたる書物から引用されたものでした。

昼は仕事に夜は活動に多忙を極めるなか、しかも男子部のメンバーに、激励の和歌やメッセージを贈られるなかでのことです。

私は失礼と思いつつ「部隊長はいつ勉強されるのですか？」と質問したことがあります。その時、先生は「私の話していることはすべて戸田先生から教えていただいたことだよ」と話されました。

戸田先生から学んだことを、命に刻まれておられるから、原稿なしで話せるのだな、と大変に感動したものです¹⁴⁵。

(3) 戸田と池田の「詩心、の交流

戸田と池田の間は、詩歌・漢詩などを話題にした語りがあった¹⁴⁶。二人は、感謝や決意を詩歌に託して交換している¹⁴⁷。信用組が業務停止となり、「お金もない、人もいない、まったく、どん底」にあった戸田が、ふとそばにあった一輪の花を取り、まるで「勲章、のように池田の胸元に挿したことがあったという。これらは、二人に「詩心、がなければ生まれないエピソードで

¹⁴² ブラジル・ベルナンブコ連邦大学「名誉博士号」授与式における池田大作の謝辞（『聖教新聞』2021年12月7日付）、3面参照。

¹⁴³ 『池田全集・第126巻』、372～373頁。あわせて、『池田全集・第96巻』の380頁を参照。

¹⁴⁴ 1953年頃の男女青年部の編成は、部長・部隊長・班長・隊長・分隊長・部員。

¹⁴⁵ 『聖教新聞』1999年12月26日付7面。

¹⁴⁶ 『池田全集・第99巻』、370頁参照。1959年1月に池田が北海道を訪れた時、同行した青年たちに、「戸田先生は、詩人でいらっちゃった、と語っている（『聖教新聞』1959年1月23日付5面の「総務ら一行歌の旅」を参照）。

¹⁴⁷ 『評伝 戸田城聖』下巻、98頁・118～119頁の注(48)・131～132頁参照。

ある¹⁴⁸。

戸田は和歌を詠み、会員に励ましの言葉を贈っていた¹⁴⁹。それは、叙景や抒情といった文学作品ではない。池田は、次のように記している。

思えば恩師も、折りにふれて和歌や句を詠まれ、門下に贈られた。よくペンを執られたまま詩想をめぐらされた。書き上がるとメガネをはずされ、紙片に顔をすりつけるようにして推敲しておられたものである。

数学の天才であっても、文学的な技巧という面からいえば、必ずしもプロの素養を身につけられていたわけではない。だが、詩とは「境涯」である。恩師の言々句々には、贈られた者の胸いっぱい広がる愛情があった。その人を奮い立たせずにはおかない、強い強い励ましの心の鼓動があった¹⁵⁰。

池田もまた、折に触れて、会員への励ましを詩歌に託している。彼は、戸田と出会う前から詩を作っていたが、励ましを詩歌に託すことは、戸田の振る舞いから学んでいる¹⁵¹。

(4) 御書講義担当者会・教学部員対象の研究会

戸田は、創価学会の地区などで月2回の御書講義を担当する幹部に対して、事前の勉強会を持っていた。また、教学部員対象の研究会¹⁵²では、担当を決めて発表させたり、戸田から矢継ぎ早に質問したりすることもあった。池田は、地区講義¹⁵³担当者の勉強会とともに、教学部員の研究会に出席している。池田は、次のように記している。

地区講義を担当することになった講師には、私も含めて青年が多かった。

現場第一である。実践第一である。これが、稀有の師であられる戸田先生の、弟子たちに対する訓練であった。

それだけに、先生がしてくださる、担当者への事前の講義は峻厳であった¹⁵⁴。

また池田は、「百六箇抄」について、戸田から一対一の講義を受けている。

¹⁴⁸ 『池田全集・第136巻』、271頁参照。あわせて、デイビッド・クリーガー／池田大作『希望の選択』（河出書房新社、2001年）の172頁を参照。

¹⁴⁹ 『戸田城聖全集・第1巻』（聖教新聞社、1981年）には、337首の和歌が収録されている。

¹⁵⁰ 『池田全集・第126巻』、316頁。

¹⁵¹ 同前、316～317頁参照。

¹⁵² 教学部員による研究会では、日寛の「文段」や「六巻抄」を教材にしている。当時の教学部は、教授・助教授・講師・助師で構成されていた。

¹⁵³ 創価学会では、各支部のもとに地区が置かれている。「地区講義」については、本稿の「7. 創価学会は「校舎なき総合大学。」で詳述。

¹⁵⁴ 『池田全集・第132巻』、129頁。あわせて、前出の『御書と青年』の122～123頁を参照。

〔教学部員の代表に〕百六箇抄とか、御義口伝とか、観心本尊抄とか、そういう課題を先生がお決めくださって勉強させたのです。その時の私の課題が百六箇抄であって、先生のもとへた方に会社を終わってから、いつも勉強に行っておった¹⁵⁵。

「百六箇抄」の講義を受けた時期もあった。

ある日、先生は、横になってお休みであったにもかかわらず、「よし、やろう！」と言われて、快く教えてくださったこともある。

しかし、私に少しでも真剣さが欠けた時には、先生は言下に叱咤された。

「やめた！ 私は機械じゃないんだ」¹⁵⁶

(5) 創価学会の組織のなかで受けた薫陶

池田が戸田から受けた薫陶は、書物を通してだけではなかった。池田には、創価学会のいくつかの役職を兼務させ、その中で厳しく訓練している。創価学会が新しい展開をするための対応や、極めて困難な局面にあえて立たせたりしながら、池田を育てていった¹⁵⁷。代表的なものとして、前者では、参謀室長や渉外部長¹⁵⁸、後者では、参議院議員選挙大阪地方区の責任者に任じたことが挙げられる。

〈付記〉なお、上記以外に、戸田が出席した研究会には、以下のものがあつた。

東京大学法華経研究会

1953年4月18日に数人の東京大学法華経研究会の学生を対象に始まった法華経講義では、戸田が「御義口伝」に基づいて講義した。一方的でなく、学生の質問に一つ一つ丁寧に答えていたため、なかなか先に進まなかったという。55年9月までに26回開催され、55年になると東大以外の学生も参加するようになった。その後、この講義の受講者が、57年6月に結成される学生部の核になっている。なお、池田は多忙であったため、一緒に参加することはなかったという¹⁵⁹。

教育者懇談会

幼稚園から大学までの教員もしくは経験者による「教育者懇談会」（その後「教育者クラブ」と改称）が、1953年6月23日に発足している。この懇談会には、戸田は何度も出席し、同年11月に出版された牧口常三郎著・戸田城聖補訂の『価値論』を研鑽するとともに、それぞれの教育

¹⁵⁵ 前出、座談会「池田会長に聞く学会伝統の「実践の教学。」、4面参照。

¹⁵⁶ 『池田全集・第130巻』、284頁。

¹⁵⁷ 詳細は、『評伝 戸田城聖』下巻を参照。

¹⁵⁸ 『池田全集・第72巻』の304～305頁、『池田全集・第89巻』の192～193頁、『池田全集・第95巻』の100～101・132・354～355頁、『池田全集・第100巻』の297～298頁、などを参照。

¹⁵⁹ 篠原誠「戸田城聖と学生—東大法華経研究会50周年記念—」（『創価教育研究』第2号、創価大学創価教育研究センター、2003年）の177～184頁などを参照。講義を最初から受講した篠原は、池田について「勉強会の終わり頃になってよくお見えになり、『戸田先生から、講義を受けられるのは、大変なことだよ』と、何回も激励を受けたことがございました」（181頁）と語っている。

現場における創価教育学の応用についても話し合われた¹⁶⁰。

5. 民衆救済の「大志」

戸田は、「生き方とは、志のことだよ。人生の深さは、志の深さで決まる」と語っている¹⁶¹。彼が1945年7月に出獄する前年の11月、師である牧口常三郎が獄死した。同じ頃戸田は、獄中での思索の中で、法華経に出てくる地涌の菩薩¹⁶²としての自覚に立つ。さらにその後も思索を重ね、日蓮仏法による民衆救済を自らの使命とした¹⁶³。それを端的に表しているのが、創価学会第二代会長就任式（1951年5月3日）における、戸田の次の発言である。

私が生きている間に七十五万世帯の折伏は私の手です。もし私のこの願いが、生きている間に達成できなかったならば、私の葬式は出してくださるな。遺骸は品川の沖に投げ捨てていただきたい¹⁶⁴。

日蓮仏法による民衆救済の志は、戸田の師である牧口から継承したものであった。太平洋戦争の最中の1943年6月27日、牧口は、所属する日蓮正宗の管長から、軍人主導の政府の宗教政策に創価教育学会¹⁶⁵も迎合するよう求められた。彼は、それを拒絶しただけでなく、たとえ日蓮正宗が弾圧されて滅びるようなことになったとしても、誤った宗教政策を改めるよう政府に諫言すべきであると管長に進言している¹⁶⁶。つまり、牧口は、宗教団体の存続よりも、大事なことがあると考えていたのである。それは、民衆を不幸のどん底に突き落とすはならないということ

¹⁶⁰ 教育者懇談会および教育者クラブの記録が確認できなかったため、参加対象でない池田が、出席していたかどうか明らかでない。

¹⁶¹ 『池田全集・第128巻』、127頁参照。池田は、「大きな「志」は大きな人生をつくります。教育の核心は、その「志」をどう引き出し、力を発揮させるかにあると思っております」（前出、『母への讃歌』、349頁）、「牧口会長と、戸田会長の平和と人道の『大志』が、創価教育に学ぶ青年たちに脈々と受け継がれていることを、私は何よりも心強く思っております」（同前、351頁）と述べている。

¹⁶² 「地涌の菩薩」は、法華経の従地湧出品第15において、釈尊の呼び掛けにこたえて、下方の虚空から湧き出てきた無数の菩薩たちのこと。地涌の菩薩は、如来神力品第21において、釈尊滅後の法華経の流布を託された（前出、『教学用語集』、184頁参照）。あわせて、池田大作『御書と師弟 2』（聖教新聞社、2010年）の60～61頁を参照。

¹⁶³ 戸田城聖「創価学会の歴史と確信（下）」（『大白蓮華』第17号、創価学会、1951年8月）の1～2頁、および、『池田全集・第70巻』の312～313頁を参照。

¹⁶⁴ 『戸田城聖全集・第3巻』（聖教新聞社、1983年）、433頁参照。戸田が会長に就任した頃の創価学会の会員は、3千人ほどであった（「戸田会長推戴賛意署名簿」参照）。池田は次のように述べている。「七十五万世帯達成は、まさに〔戸田〕先生の『出世の本懐』であったと思えてならない。

しかし、先生は、その生涯の願業の成就さえも、一つの通過点にすぎないかのように、瞬時も立ち止まらず、一心に未来を見つめておられた。

この世から『悲慘』の二字をなくすことが、わが師の念願であった」（『池田全集・第130巻』、442～443頁）

¹⁶⁵ 創価教育学会は、1930年11月に牧口と戸田の二人によって設立された。40年10月に牧口が会長、戸田が理事長に就任。42年8月時点の会員は3千人（『評伝 戸田城聖』上巻、235～236・333～334・394頁参照）。

¹⁶⁶ 前出の「創価学会の歴史と確信（下）」の1頁、および、『評伝 牧口常三郎』の423～426頁を参照。

あった¹⁶⁷。

そして、進言からわずか9日後の7月6日、牧口と戸田は特高警察によって検挙されている。その後牧口は、1944年11月に東京拘置所で獄死。戸田は、同拘置所で2年間の獄中生活を送ることになる。

戸田城聖、さらには、後継者となった池田大作を理解していく上で、戸田の心中にあったこの『大志』を理解することが、きわめて大事であると思われる。池田は、1956年7月に21世紀を展望して戸田と語り合ったことを、次のように記している。

その時、〔戸田〕先生は、「大作の後半生の時代には、創価学会は、人類の平和と文化の不可欠な中核体となるだろう」と、未来を予見されるように語られた。さらに先生は言われた。

「創価学会は、間違いなく、宗教界の王者になるにちがいない。そのことによって、社会のあらゆる分野に、政治や経済や教育や文化の世界に、真に優れた人物を送り出すことができる。それが使命なのだ。それらの人たち、一人一人の偉大な人間革命が、新しい世紀における人類社会に偉大な貢献をすることになる」

これが、戸田先生が思い描いた21世紀の創価学会像であった¹⁶⁸。

また戸田は、亡くなる約二週間前に、次のように池田へ語ったという。

メキシコへ行った夢を見たよ。待っていた、みんな待っていたよ。日蓮大聖人の仏法を求めてな……。君の本当の舞台は世界だよ¹⁶⁹。

戸田の心にあったのは、地球上のすべての人々が幸福に暮らすことができる社会の実現であった¹⁷⁰。彼の『大志』を、端的に表した三つの発言を挙げてみたい。

(1) 「地上から、『悲惨』の二字をなくしたい」

第一は、戸田がたびたび述べている「地上から、『悲惨』の二字をなくしたい」という言葉である¹⁷¹。池田は、戸田と初めて会った時（1947年8月）にも、この言葉を戸田が口にしていたと

¹⁶⁷ スチュアート・リース／池田大作『平和の哲学と詩心を語る』（第三文明社、2014年）、293頁参照。

¹⁶⁸ 『池田全集・第92巻』、144～145頁。

¹⁶⁹ 『池田全集・第138巻』、223頁参照。あわせて、『池田全集・第72巻』の285頁、『池田全集・第82巻』の143～144頁、『池田全集・第126巻』の130～131頁、『池田全集・第127巻』の356～357頁、などを参照。

¹⁷⁰ 前出、『戸田城聖全集・第1巻』、302頁参照。

¹⁷¹ 『聖教新聞』1957年1月1日付第一元旦号1面の年頭語の辞「仏法で民衆救済」、および、『池田全集・第73巻』の288頁を参照。戸田は、「仏法の目的は、全人類の人格を宇宙大の最高の境涯に高めていくことだ。そうすれば戦争も不幸もなくなるだろう」と語っていたという（アレクサンドル・セレプロフ／池田大作『宇宙と地球と人間』、潮出版社、2004年、295頁参照）。

いう¹⁷²。池田は、次のように述べている。

戦争中、そして動乱の戦後のなかにあつて、最も苦しみ、最も生活の犠牲を強いられたのは、女性たちであった。

(中略)

その人生と生活の中には、慟哭があつた。限りない地獄があつた。

その女性たちの安穏と満足と幸福の大道を開きゆくことが、私の師匠である戸田城聖の命がけの戦闘であつた。

「地上から、`悲惨、の二字をなくしたい!」

この熱願が、戸田先生の根本的思想であつたのである¹⁷³。

戸田は、戦乱に巻き込まれ、悲惨な状況に置かれている外国の民衆のことを心に留めていた。1950年6月に始まった朝鮮戦争について、次のように述べている。

あの朝鮮の動乱を見よ。地獄の苦にあえぐ朝鮮民族を救うは誰か、明日の日を知らず迷う東洋民族の否世界人類に光明を与える力は何か。大聖人様の御慈悲を蒙せる以外に何ものもないではないか。(1951年、支部長会)¹⁷⁴

此の戦争に依つて夫を失ひ妻をなくし子を求め親を探す民衆が多く居りはしないかと嘆くものである。(1951年、論文「朝鮮動乱と広宣流布」)¹⁷⁵

また、1956年10月に起こつた「ハンガリア問題」¹⁷⁶については、次のように述べている。

昨冬ハンガリア問題が世界の注目を引いた。そのくわしい事情に就いては知る由もない。(中略)ただ国民が悲痛な境遇にあることだけは察せられる。貧乏と困苦の生活の上に加えられたものは鉄火の見舞である。

¹⁷² 山本伸一「随筆 我らの勝利の大道 112 地涌の誉れの『8・24』」(『聖教新聞』2013年8月24日付3面)を参照。8月24日は、池田が創価学会に入会した日。「山本伸一」は、池田のペンネーム。

¹⁷³ 『池田全集・第135巻』の410～411頁。

¹⁷⁴ 『聖教新聞』1951年4月20日付1面参照。

¹⁷⁵ 『大白蓮華』第14号(創価学会、1951年5月)、1頁。「広宣流布」とは、仏法を広く宣べ流布すること。戸田は、「広宣流布とは全人類の境涯を最高の価値にまで引き上げ、地球上に真の幸福と平和を実現しゆくことである」と語っていた(『池田全集・第87巻』、247頁参照)。池田は、「世界の広宣流布は、仏法の究極の大願である。言い換えれば、この世界から『悲惨』の二字をなくし、人類の幸福なる恒久平和を実現することであるのだ。一宗教の繁栄が目的ではない。全民衆の幸福が根本の目的である。『人間』のために、仏法はあるからだ」(『池田全集・第135巻』、49頁)と述べている。

¹⁷⁶ 「ハンガリア問題」は、1956年10月に東欧・ハンガリーの市民が政府に対して蜂起したが、ソビエト連邦(現在のロシア)の軍隊によって鎮圧された事件。

(中略)

願わくば吾人と志を同じくする同志は世界にも国家にも個人にも『悲惨』という文字が使われなようにありたいものと考えて、望み多き年頭を迎えようではないか。(1957年、年頭の辞「仏法で民衆を救済」)¹⁷⁷

そして、戸田は、『大白蓮華』1957年4月号の巻頭言の中で、次のように記している。

社会の繁栄は、一社会の繁栄であってはならない。全世界が一つの社会となって、全世界の民衆がそのまゝ、社会の繁栄を満喫しなければならない。(中略) 日本民衆の幸福のために、他の民衆を犠牲にしてはならないし、アメリカ民衆の幸福のために、日本民衆を犠牲としてはならない。共産主義の一指導者の幸福のために、他国の民衆が犠牲になってはならない。

世界の民衆が喜んでいける社会の繁栄の中に、各個人もまた喜んで生きていければなるまい¹⁷⁸。

(2) 地球民族主義

第二は、「地球民族主義」である。戸田は、1952年2月17日に開催された第一回男女合同青年部研究発表総会において、「私自身の思想を述べますならば、私は共産主義やアメリカ主義では絶対ありません。東洋民族、結局は地球民族主義であります」¹⁷⁹と語っている。戸田が「地球民族主義」という言葉を使ったのは、『聖教新聞』『大白蓮華』を見る限り、この時だけである。戸田が語った「地球民族主義」は、どういうものなのか。その手掛かりとして、次の池田の文章を紹介したい。

師は、「私自身の思想を述べておく、と前置きされ、初めて「地球民族主義、という言葉は口にされたのだ。

耳慣れぬ言葉であった。だが、それは、広宣流布の遠征が世界を相手にしていることを、いやがうえにも自覚させたのである。

当時、朝鮮戦争(韓国戦争)の戦火は未だ止まず、東西の対立は、第三次世界大戦の危機さえはらんでいた。イデオロギーや国家体制の相克は、世界の分断の溝を深め、不信と憎悪の泥沼が広がっていたのである。

恩師は、この深刻な対立を止揚する、平和と共生の指標として、「地球民族主義」を提唱されたのであろう。それは、まさに「人間という原点に立ち返れ!」「世界市民の精神に目覚めよ!」との警世の叫びであった。(2002年、随筆「わが師と地球民族主義」)¹⁸⁰

¹⁷⁷ 『聖教新聞』1957年1月1日付第一元旦号1面。あわせて、同紙2面を参照。

¹⁷⁸ 戸田城聖「王仏冥合論(九)」(『大白蓮華』第71号、創価学会、1957年4月、1頁)。

¹⁷⁹ 『聖教新聞』1952年3月1日付1面参照。

¹⁸⁰ 『池田全集・第133巻』、197頁。

宇宙の根本法たる仏法の真髓を覚知された戸田先生は、つねに宇宙的視野から、物事を考えられていた。

そして、東西両陣営の対立の溝が深まる1952年（昭和27年）2月、先生は「地球民族主義」の叫びを放たれた。

民族、国家、イデオロギーなどを超え、人類が「地球家族」「世界は一つ」という認識に立って、共存への道を開かなくてはならないというのが、先生のお考えであられた。（1998年、随筆「地球民族主義の光」¹⁸¹）

戸田会長も、いかなる国の民衆も戦争や人権抑圧の犠牲になることを許してはならないと、国家の垣根を超えた「地球民族主義」を提唱していました。

その戸田会長が当時、青年だった私たちに訴えた、「国連は、二十世紀の人類の英知の結晶である。この世界の希望の砦を、次の世紀へ断じて守り、断じて育てていかねばならない」との言葉を忘れることができません¹⁸²。

(3) ‘原子爆弾を用いたものは悪魔であり、魔ものであるという思想を、全世界に弘めることこそ、全日本青年男女の使命である。

第三は、1957年9月8日に開催された第4回東日本青年部体育大会における、戸田が「遺訓すべき第一のもの」とした次の発言である。後にこの発言は、「原水爆禁止宣言」と言われるようになった。

もし原水爆をいずこの国であろうと、それが勝っても負けても、それを使用したものは、ことごとく死刑にすべきであるということを主張するものであります。なぜならば、われわれ世界の民衆は、生存の権利を持っております。その権利をおびやかすものは、これ魔ものであり、怪物であります。それをこの人間社会、たとえ一国が原子爆弾を使って勝ったとしても、勝者でもそれを使用したものはことごとく死刑にされねばならんということを、私は主張するものであります。

たとえある国が原子爆弾を用いて、世界を征服しようとも、その民族、それを使用したものは悪魔であり、魔ものであるという思想を、全世界に弘めることこそ、全日本青年男女の使命であると信ずるものであります¹⁸³。

この‘原水爆禁止宣言、から2カ月後の11月20日朝、戸田は、12年前に原爆が投下された広島市へ行くこうとして、自宅の玄関で倒れた。それ以降戸田は、自宅での静養を余儀なくされて

¹⁸¹ 『池田全集・第129巻』、247～248頁。

¹⁸² ケビン・クレメンツ／池田大作『平和の世紀へ 民衆の挑戦』（潮出版社、2016年）、381頁。

¹⁸³ 第4回東日本青年部体育大会の音声記録、および、『聖教新聞』1957年9月13日付1面による。戸田は、同趣旨のことを、総合雑誌『キング』第33巻第11号（大日本雄弁会講談社、1957年11月）に掲載された随筆「ある友人の話から」の中に書いている。

いる。実は、19日、極度に衰弱している戸田の身体を案じた池田が、広島行きをやめるよう説得した。しかし戸田は、「一度、決めたことを止められるか。男子として、死んでもゆく」と言って、頑として聞き入れなかったという¹⁸⁴。

歯科医師の浅井亨は、被爆した方々への戸田の心情が推量できる、次のような手記を書いている。

〔戸田〕先生御来阪のあるとき自動車の中で「浅井、原子病は直るか」「ソウデスネ科学ではその力の及ぶ範囲もわからない現在、到底医学では直せません」と申し上げましたら「御本尊様なら必ず直るヨ」と申されました。それから間もなく、昭和32年9月、横浜三ツ沢グラウンドのあの原水爆宣言が遺訓の第一として、堂々と全世界に対して大獅子吼されたのであります¹⁸⁵。

原爆は絶対に使わせない。また、原爆の後遺症などで苦しんでいる人には、命の限り励まし、健やかな生活へと導きたい。これが戸田の心であった。池田は、「戸田会長は仏法者として、核兵器が長く人類の頭上を覆う最大の脅威となるであろうことを、生命の深い次元から「直感的、に感じ取っていたのだと思います」¹⁸⁶と述べている。

さらに池田は、次のようにも記している。

核兵器とは、「生存の権利」を脅かす「絶対悪」であり、核廃絶なき「平和」は虚構です。この核兵器の本質を、民族でもイデオロギーでもなく、人間の「生命」という地平に立つことによって明らかにしたのが、1957年9月8日の「原水爆禁止宣言」だったのです。

(中略)

むしろ、戸田会長は仏法者であり、「死刑制度」には反対でした。あえて「死刑」という言葉を使ったのは、原水爆を持ちたいという人間の「魔の衝動」に、楔を打ち込み、原水爆を使用しようとする魔を絶滅させたかったからにはほかなりません。「死」という言葉の対極にある「生」を確かなものとするためです¹⁸⁷。

私は、戸田第二代会長から、「人類の平和と進歩のためには、具体的な提案をすることが大切であ

¹⁸⁴ 『池田全集・第37巻』の218～219頁、『池田全集・第129巻』の349頁、『池田全集・第138巻』の128～129頁、『評伝 戸田城聖』下巻の391～392頁、などを参照。

¹⁸⁵ 浅井亨「戸田先生の大確信にふれて」(『大白蓮華』第107号、創価学会、1960年4月)、70頁。

¹⁸⁶ ジョセフ・ロートブラット／池田大作『地球平和への探求』(潮出版社、2006年)、125頁。戸田は、核戦争について、「原水爆禁止宣言」の6年前に書かれた「創価学会の歴史と確信」の中で、「世界の文化がいくら発達しても、国と国とのもつ間柄が道徳を無視して実力と権力斗争の世界では決して人類の真の幸福はない。不幸にして原子爆弾による戦争が起こったならば世界の民族は崩壊の道をたどる以外にない」(『大白蓮華』第16号、創価学会、1951年7月、3頁)と記している。また、「原水爆禁止宣言」の前にも、雑誌の対談などで、原水爆は禁止すべきであるとたびたび語っている(『評伝 戸田城聖』下巻、388～389頁参照)。

¹⁸⁷ 前出、『希望の選択』、237頁。あわせて、『池田全集・第73巻』の288頁を参照。

る」と繰り返し教えられました。

「たとえ、すぐには実現できなくとも、やがてそれが〘火種、となり、平和の炎が広がっていく。空理空論はどこまでも虚しいが、具体的な提案は、実現への〘柱、となり、人類を守る〘屋根、ともなっていく」と、師は強調していました¹⁸⁸。

6. 〘戸田大学、で何を学んだか

池田は、「私は恩師・戸田先生のもとで10年間、毎朝のように、万般の学問を打ち込んでいただいた。それだけではない。折に触れて教えていただいた人間学、指導者論は数知れない」¹⁸⁹と述べている。また、創価学会における師弟について、次のように語っている。

理想が偉大であればあるほど、一つの世代で、すべてを実現することは難事です。

ゆえに、次の世代への継承が必要となる。

世代から世代へ、着実に社会で根付かせていってこそ、輝きを増す。

その意味で言えば、「師弟」とは、同じ理想を分かち合い、その実現に向かって戦う最高無二の同志といえるのではないでしょうか¹⁹⁰。

それでは、池田が戸田からどのようなことを学んだと考えられるのか。以下、池田の発言や随筆から、まとめてみたい。

(1) 日蓮仏法は、万人のためにある

池田は「私への訓練の根幹に置かれたのが、末法の民衆救済の一書たる『御書』の研鑽であった。土台がしっかりしていなければ、すべて砂上の楼閣となってしまうからだ」¹⁹¹と述べている。戸田は、戦前の創価教育学会の幹部が軒並み退転してしまったのは、日蓮仏法を深く研鑽してこなかったからだと考えた。そして、獄中で法華経を精読する中で覚知した仏法の真髓を踏まえ、地涌の菩薩としての自覚（民衆救済の使命感）¹⁹²を会員の中に浸透させるため、法華経や御書の講義に力を入れている。

池田は、戸田の獄中での悟達について、次のように述べている。

〔戸田は〕「仏とは何か」を追求しぬいて、仏とはほかならぬ自分のことであり、宇宙の大生命であり、それらは一体であると分かった。

¹⁸⁸ 前出、『地球平和への探求』、140頁。

¹⁸⁹ 創価教育代表協議会（2006年6月4日）でのスピーチ（『聖教新聞』2006年6月12日付）の2面。

¹⁹⁰ 前出、『明日をつくる 〘教育の聖業』、208～209頁。あわせて、『池田全集・第92巻』の17～18頁を参照。

¹⁹¹ 『池田全集・第134巻』、135頁。

¹⁹² 『池田全集・第59巻』の483頁、『池田全集・第85巻』の149頁、季羨森／蔣忠新／池田大作『東洋の智慧を語る』（東洋哲学研究所、2002年）の233～235頁、などを参照。

(中略) 自身の根源を掘り下げていく時、そこに万人に共通する生命の基盤が現れてきた。それが永遠の宇宙生命です。戸田先生は、まさに自身の根源を悟られるとともに、「あらゆる人が、じつは根本においては地涌の菩薩である、という人類共通の基盤を悟られたのです」¹⁹³。

戸田は、「一事業の危機ですまされるものでなく、誕生まもない『創価学会』が断絶するかどうかというせとぎわ」¹⁹⁴にあっても、始業前に毎朝、池田への「訓練の根幹」である御書講義を継続した。この戸田直伝の講義が、その後の池田の活動に活かされていくことになる。

また、戸田の会員への講義は、獄中での悟達に基づき、民衆の心の中に勇氣と希望を沸き立たせるものであった。しかしそれは、僧侶（聖職者）によって受け継がれてきた僧侶中心の考え方とは異なるものでもあった。そのため、創価学会員が増加していく中で、僧侶たちとの軋轢が何度も起きることになる¹⁹⁵。それを乗り越え、御書全集の発刊や創価学会の法人化など、万人のための宗教の基盤を確立したのが戸田であり、一体となって進めたのが池田であった。

池田は、日本正学館に入社以来、戸田とともに数々の困難を乗り越えてきた。そして、日々の行動や振る舞いを身近で見てきた。池田は次のように述べている。

戸田先生がいつも教えられたのも、「人びとを愛せよ」「民衆を愛せよ」ということであった。一方、「指導者は民衆のために働け」とよく言われた。地位や権威で人を見下す人間には厳しい先生であった。庶民とともに生き、庶民を心から愛された先生であった。(1992年、月刊誌『第三文明』に連載された「続・若き日の読書」)¹⁹⁶

何よりも私は、恩師の人格から学びました。

投獄にさえひるまなかつた、平和へのあの断固たる情熱を、恩師は終生、燃やし続けました。

そして、苦悩の民衆の中に分け入って、人々と交流を間断なく続けました。その深き人間愛こそ、私が恩師より最も教えられたものなのであります。(1996年、コロンビア大学での講演)¹⁹⁷

(2) 平和社会実現への断固たる意志

池田が少年雑誌の編集長として携わった記事の中で、特筆すべきは、『少年日本』の1949年10月号と11月号の原子力と原子爆弾についての特集である。特に11月号には、広島への投下

¹⁹³ 池田大作『普及版 法華経の智慧〔中〕 二十一世紀の宗教を語る』(聖教新聞社、2012年)、212頁。

¹⁹⁴ 『池田全集・第71巻』、87頁。

¹⁹⁵ 『評伝 戸田城聖』下巻の171～178頁・198頁の注(28)・310～313頁などを参照。

¹⁹⁶ 池田大作「続・若き日の読書 第9回」(『第三文明』第377号、第三文明社、1992年9月)、28頁。『池田全集・第23巻』の313頁に収録。

¹⁹⁷ 『池田全集・第101巻』、427頁。

直後を描いた小説「原子野の花」が掲載されている¹⁹⁸。

当時日本は連合軍の占領下であり、全ての出版物が検閲の対象であった。特に、原子爆弾についての記述は、厳しく検閲されていた。その中で、広島を惨状を描いた小説を掲載したのである。検閲の結果次第では、発行禁止になる。そうなれば、日本正学館は大打撃を受ける。これほどのリスクを承知の上で企画されたのは、戸田社長の強い意志があったからにはほかならない¹⁹⁹。この経験は、戸田の心の中にある平和社会実現への断固たる意志を池田へ伝えることになった。

逝去する7カ月前の1957年9月、戸田は、約5万人の会員を前に、前述の「原水爆禁止宣言」を行った。この発言を遺訓として心に留めた池田は、11年後（1968年）の同日に「日中国交正常化提言」を発表²⁰⁰。さらに、74年の同日にはソビエト連邦（現在のロシア）を初訪問。同年12月には再度中国を訪れ、対立関係にあった両国の和解に向けた民間外交を展開している。

また、創価大学開学2年前の1969年5月に、同大学の創立者である池田は、大学の基本理念の一つとして、「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」を提唱。創価大学設立の目的の一つが、民衆の幸福と平和を守り抜くことであるとした²⁰¹。

(3) 創価学会を大きく発展させていくための指導者学

池田が戸田から受けた薫陶の核心にあったのは、今後創価学会をどのように発展させていくかということであった²⁰²。池田は、次のように記している。

戸田先生の教えは、つねに抽象論ではなかった。現実の「急所」を押えた、生きた知恵であった。

歴史を論じて、たとえば「あの民族は、なぜ興隆したのか」「この国家は、どうして衰亡したか」、また「あの宗教は、なぜ栄えたのか」「なぜ衰退したのか」等々、個人についても、集団についても、さまざまな「興亡の歴史」に焦点をあてられた。そのようにして、青年に鋭く、深い「史観」を養

¹⁹⁸ 「原子野の花」については、前出の『平和の朝へ 教育の大光』の136～137頁、および、「民衆こそ王者 池田大作とその時代 希望を繋ぐ人篇（7）」（『潮』第753号、潮出版社、2021年11月）の130～138頁を参考にさせていただきたい。

¹⁹⁹ 連合軍総司令部（GHQ）の検閲を受けた『少年日本』1949年11月号の表紙には、60,000部を印刷したことを示す検閲者の書き込みがある（アメリカ・メリーランド大学ホーンバイク図書館ゴードン・W・ブランゲ文庫所蔵資料による）。60,000部は、判明している『冒険少年』『少年日本』各号の印刷部数の中では、最も多い。

²⁰⁰ 池田は、「戦後〔戸田は〕、創価学会の再建に取り組む一方で、アジアの平和のために行動することを、青年たちに訴えたのです。『日本はアジアの国から心より信頼されるようになった時に、本当の平和国家といえる』とも、よく言っていました。私は、1968年の9月、この師の心を心として、『日中国交正常化提言』を発表しました」（章開元／池田大作『人間勝利の春秋 歴史と人生と教育を語る』、第三文明社、2010年、75頁）と述べている。また池田は、1964年の公明党結党に際し、党の外交政策の骨格として「中華人民共和国を正式承認し、日本は中国との国交回復に努めるべきである」と提案している（公明党史編纂委員会編『増訂版 大衆とともに 公明党50年の歩み』、公明党機関紙委員会、2019年、36頁参照）。

²⁰¹ 『聖教新聞』1969年5月5日付4面参照。あわせて、前出の『平和の哲学と詩心を語る』の220～222頁を参照。

²⁰² 戸田は、「民衆万年の幸福を確立することが、創価学会の使命である」と語っている（『戸田城聖全集・第4巻』、聖教新聞社、1984年、372頁参照）。

わせながら、広布の万代にわたる発展の歴史を、どう築いていくかを教えられたのである。(1988年、第2回神奈川県支部長会)²⁰³

「戸田大学」は、ある時は一対一で、また、数名のメンバーと共に、断続的に続けられた。その間、先生は、私に「正義の大指導者学、ともいふべき、万般の学問を授けてくださったのである。(2003年、随筆「恩師の峻厳な日曜講義」)²⁰⁴

「戸田大学」の講義の折々に、先生は語られた。

「勉強だよ。勉強だ。妙法の智慧者とならなければ、今後の大使命は果たせない。社会万般のことは無論だが、全世界の運命のなかに、自分というものを置いて、そこからすべての発想をすることが、必要な時になっている」(2007年、随筆「桜花の『4・2』に恩師を想う(下)」)²⁰⁵

(4) 人間としての誠実さ

1949年10月、戸田は出版業から手を引くことを決断した。それは、資本力がある競合誌が増えてきたことで、会社の経営が立ち行かなくなったからである。社員は、同じ建物で営業を始める東京建設信用組合で働くことになった。池田も、月掛け貯金の募集や集金などを担当する。開業したばかりの小さな信用組合が顧客に信頼してもらえるかどうかは、営業担当者の印象で決まる。池田は、一回一回の出会いを大事にしながら、毎晩遅くまで新規開拓に努めた²⁰⁶。

実はこの年、インフレが進む日本経済を立て直すため、中小の事業者を切り捨てるような政策が断行されていた。そのため、多くの事業者が倒産を余儀なくされた。東京建設信用組合も経営状態が悪化。1950年8月に大蔵省(現在の財務省)から業務停止命令を受けることになった。社員は次々と退職し、外回りは池田一人になる。結核を患っていた池田にとって、精神的にも肉体的にも過酷な日々となった。その中で池田は、戸田から「人間対人間のこの社会で、なによりも肝心なことは、結局、誠意以外のなにものでもないことを、口をすっぱくして教えられた」²⁰⁷という。池田は、次のように記している。

債権者の人々に対して、先生は、誠意をつくしてあたり、事態の收拾にうちこんだ。私も、そうした席に、同伴されるのが常だったが、それは単に私が社員であるからというのではなく、私を教育するためであったと思われる。——渉外にあたっての、相手の人物に対する認識や、折衝後の判

²⁰³ 『池田全集・第71巻』、270頁。あわせて、『池田全集・第69巻』の196頁を参照。

²⁰⁴ 『池田全集・第134巻』、134頁。

²⁰⁵ 『池田全集・第138巻』、147～148頁。

²⁰⁶ 池田の紹介で創価学会に入会した土屋せつ子からの聞き取りの記録などによる。

²⁰⁷ 『池田全集・第18巻』、155頁。あわせて、『池田全集・第71巻』の484頁、『池田全集・第72巻』の576～577頁、『池田全集・第87巻』の169頁、『池田全集・第97巻』の379頁、『池田全集・第124巻』の364～365頁、などを参照。

断と手の打ち方等を、先生は、事こまかに教え、訓練してくださった²⁰⁸。

当時、大蔵省関東財務局理財部金融課長であった小林春男は、「40年を経た現在も、お互いに信頼し、話し合えた故理事長〔＝戸田〕の人格の内なる光をいまだに忘れることができない²⁰⁹」と、後日著書に記している。

また、信用組合の営業停止直後には、それを聞きつけた新聞記者が訪れているが、翌日戸田と池田が誠意を尽くして事情を説明したことにより、その記者は記事にすることを断念したという²¹⁰。

晩年戸田は、多くのジャーナリスト・作家・評論家と会っている²¹¹。その中には、共産党の元中央委員や僧籍にある者もいた。彼らが書いたものを読むと、そのほとんどが好意的な内容である。飾らない振る舞いの中で戸田は、彼らの心をしっかりつかんでいた。これらの記事は、1954年12月に池田が創価学会の渉外部長になり、戸田と池田の二人が誠実に対応してきたからであろう。

また戸田は、1954年頃に岸信介（1957年2月から60年7月まで首相）と親交を結んでいる²¹²。このつながりから、首相になった岸が、1958年3月16日に6千人の青年たちが待つ大石寺を訪れることになった。これは、当日朝に岸の側近から強い反対があって実現しなかったが、1カ月後の4月20日に行われた戸田の学会葬に岸が参列し、マスコミなどを驚かせている²¹³。

(5) 戸田が考える創価教育の学校における教育はいかなるものか

牧口から託された学校設立²¹⁴について、戸田はどのように考えていたのだろうか。『創価教育学体系』の第1巻出版から20年となる1950年11月、戸田は、創価大学設立の構想を池田に語っているが²¹⁵、その詳細は明らかではない。しかし、彼がどんなことを考えていたか推察する手掛かりは、`戸田大学、の中にある。

池田は、`戸田大学、は「戸田城聖という『人間学』の天才の個人授業」²¹⁶と述べている。浅

²⁰⁸ 『池田全集・第18巻』、154頁。

²⁰⁹ 小林春男『信用金庫経営論』（日本経済評論社、1992年）、27頁。

²¹⁰ 『池田全集・第137巻』の281～282頁、および、山本伸一「随筆 我らの勝利の大道 27 聖教と共にさあ前進!①」（『聖教新聞』2010年8月30日付3面）などを参照。

²¹¹ 『評伝 戸田城聖』下巻、286～290頁の注(44)参照。

²¹² 同前、416～417頁の注(40)参照。

²¹³ 『朝日新聞』など各紙の1958年3月17日付朝刊および同年4月21日付朝刊を参照。

²¹⁴ 小平芳平は、牧口から、創価大学の構想を聞いていた。1955年11月3日に後樂園球場で行われた第13回創価学会秋季総会において、「先代の会長牧口先生が絶えず、創価大学、総合大学という事を、お話になって居られましたが、その総合大学の実現、総合大学の建設も必ずや間近いものと、確信してやまないものであります」（『聖教新聞』1955年11月13日付2面参照）と述べている。

²¹⁵ 『評伝 戸田城聖』下巻、102～104頁参照。あわせて、『池田全集・第59巻』の412頁および『池田全集・第143巻』の517頁を参照。

²¹⁶ 『池田全集・第130巻』、248頁。

野秀満によれば、創価大学の開学（1971年）にあたり、池田は人間学部と国際関係学部（仮称）の開設を考えていたという²¹⁷。

創価大学設立準備財団の事務局長を務めた岡安博司は、次のように語っている。

創立者は「『人間学部』を最初につくりたい」とのお考えでした。当時、他大学にまだ例がなく先駆的な発想でした。この件について、文部省にその開設の可否を聞いたところ、極めて厳しい反応でした²¹⁸。

1970年頃の文部省は、既設の名称以外の学部新設は認めない方針だった。そこで設立準備財団は、認可される可能性が高い法学部・経済学部・文学部の三学部で申請することにした。

それから20数年経って池田は、大学の首脳に人間学部の設置を検討するよう提案している。その頃までに文部省の方針は大きく変わり、「人間」を含む名称の学部・学科が数多く認可され、その教育内容も多様なものであった。筆者も参加した新学部の検討委員会では、創価大学が設置する「人間学部」は、どのようなものが良いかと教職員で議論を重ねた。そこで浮かんできた案は、アメリカのリベラルアーツ・カレッジ（教養大学）に近いものであった。しかし、それは、2001年に開学するアメリカ創価大学の構想と重なっていた²¹⁹。

筆者が、牧口・戸田・池田の評伝的研究に取り組むようになったのは、この委員会での経験が背景にある。アメリカ創価大学でできないことは何かと考え、それは、牧口・戸田・池田研究の基盤を整えることだと思いついたからである。

また、創価大学を開学して3年経った頃、創立者である池田は、屋外でも授業が行えるようにキャンパス内の林の中に広場を作りベンチを置くことなどを提案している。学生も賛同して緑に囲まれた広場や散歩道の整備に参加し、1974年5月には創立者とともに緑の丘・太陽の丘の開園式を行った。この提案は、かつて池田が経験した『戸田大学、における「対話による教育」』²²⁰の大切さを示唆したかったのかも知れない。

²¹⁷ 前出、浅野秀満『あすの創価学会』、191頁参照。

²¹⁸ 岡安博司「創価大学の開学を語る—創立者の大学構想を中心に—」（『創価教育研究』第4号、創価大学創価教育研究センター、2005年）、178頁。

²¹⁹ その後、創価大学では、2007年4月には文学部の改組転換で人間学科が、14年4月には国際教養学部が開設されている。

²²⁰ 池田は、次のように述べている。

「創大建学のモットーの第一には、『人間教育の最高学府たれ』と掲げた。『知識』ばかりではない。その『知識』を生かすための、『知恵』と『人格』こそを育みたいと思ったからである。（中略）ただ、『人間教育』といっても、特別なものではない。もとより授業のカリキュラム等については、当初から大学当局にお任せしてある。そのうえで私が心がけたのは、学生との一対一の対話であった」（『池田全集・第126巻』、30～31頁）

「本当の意味での教育—つまり、人間をつくる教育は、決して、学校教育のみではなしえないと思えてならないのだ。一個の人格をつくる教育は、天性の教師にのみ許されたものなのだと思えてくる。私は、戸田城聖先生という稀有の師に巡り会い、十一年間にわたる師弟関係を通じて、最高の人生教育を受けることができた。それが、どんなに感謝すべきことであるか、年を経るごとに、しみじみと感慨を深めずにはいられない」（『池田全集・第18巻』、158～159頁）

1929年から51年まで、シカゴ大学総長を務めたロバート・ハッチンズ（Robert Maynard Hutchins）は、グレイト・ブックス（古典・名著）による教育を提唱し²²¹、アメリカのリベラルアーツ教育の淵源の一つになった。〘戸田大学、において、池田が戸田から受けた薫陶は、このグレイト・ブックスによる教育と通じるところがあるのではないかと筆者は考えている。

1970年代以降、池田は、国内外の多くの識者と対話し、数多くの対談集も出版した。〘戸田大学、で受けた薫陶が大きく開花したのである²²²。

7. 創価学会は〘校舎なき総合大学、

戸田は、一人一人の会員と語り、励ますことに多くの時間を割いていた。1950年8月の東京建設信用組合の業務停止後、しばらくして彼は、大蔵商事株式会社の最高顧問となった。1951年5月に戸田が創価学会第二代会長に就任した後、大蔵商事は市ヶ谷ビルの一室に移転²²³。その隣に創価学会本部分室が置かれた。分室といっても、机が一つあるだけである。平日の午後、そこは会員との面接の場になった。この面接について戸田は、多い時で1日に50人の人に会えても一年間に1万5千人しか会えません、と語っている²²⁴。分室は、新宿区信濃町へ本部が移るまで約2年半存続しているので、実に延4万人近い会員と会ったことになる。太平洋戦争敗戦の余燼がくすぶる中、戸田は、深刻な悩みを抱えた会員たちと日々向き合い、わがことのように同苦して励まし続けた²²⁵。

また彼は、支部単位で行われていた座談会でも、出席者の悩みをじっくり聞いて、包み込むように、またある時は、厳しく指導している²²⁶。会員との対話は、帰りの電車の中まで続くこともしばしばあり、会員宅を一軒一軒訪問することを喜びとしていた²²⁷。

埼玉に住む壮年からこんな話を聞いた。彼がまだ高校生の時、戸田が逝去する（1958年4月）。それを聞いた母と姉は、一週間も毎晩泣いていたというのである。戸田の学会葬には約25万人が参列したが、彼らは集められたのではなく、行かずにはおれなかったのである²²⁸。まさに、戸田と一人一人の会員の心は、直結していた。

池田によれば、戸田は支部長に対して、〘人数がいくら多いからって昔の大名は二万や三万の

²²¹ R・M・ハッチンズ著／田中久子訳『偉大なる対話』（岩波書店、1956年）などを参照。

²²² 『池田全集・第127巻』の81頁、『池田全集・第139巻』の374～375頁、『池田全集・第143巻』の15・434頁、などを参照。

²²³ 大蔵商事は、新宿区百人町の仮事務所を経て、同区市谷田町の市ヶ谷ビルに移転している。

²²⁴ 『聖教新聞』1952年12月10日付1面の「会長講演」を参照。

²²⁵ 『池田全集・第73巻』の436頁、『池田全集・第131巻』の72～77頁、『池田全集・第134巻』の109～112頁、『評伝 戸田城聖』下巻の169～171頁、などを参照。

²²⁶ 小泉隆は、「戸田先生は『三人だって同志がおったら喜んで話すんだ。いや、たった一人でもよい。一人でも心から話し合い、感激し合って帰ればよいんだ』というのが口癖でした」（『大白蓮華』第350号、聖教新聞社、1980年4月、37頁）と語っている。あわせて、『池田全集・第65巻』の348頁を参照。

²²⁷ 『池田全集・第17巻』の56頁などを参照。

²²⁸ 『池田全集・第37巻』の310頁、および、『池田全集・第62巻』の354～355頁を参照。

家臣のことは全部知っていたんだ、と話したことがあったという²²⁹。実際にそうであったかは別として、戸田は、その何倍もの会員と対話し、励ましていた。

会員が増えるに従い、会員一人一人と直接話す時間が限られてきた。そこで戸田は、希望すれば誰でも彼の講義を聞くことができる大きな会場を手配した。人々は、戸田の話を聞きたい一心で、開始時間が近くなると駆けるようにして会場に集い、壇上まで人で埋め尽くされる日もあった。その中で彼は、ユーモアを交えながら御書などを講義²³⁰。さらに、誰もが納得できる「対話」を大事にして、質疑応答の時間を持つようにしていた²³¹。このような戸田の姿を、池田は身近で見ていた。

戸田が第二代会長に就任後、池田は、次々と創価学会の役職に任命された。そのたびに池田は、戸田の期待に応える結果を出して、全組織に活力を与えている。その行動の基本形は、戸田が行ってきた会員一人一人との対話と励ましである。池田は、誰よりも忠実に、それを実践したのである。

戸田は、創価学会は「校舎なき総合大学、であると語っていた²³²。戸田は、彼が抱く「大志、を担いゆく幾十万人の老若男女を一对一の対話を基本に育成したのである。

また、秋谷栄之助によれば、創価学会が短期間に発展した原動力の一つは、月2回開催された「地区講義」だという。創価学会の会員が全国各地に広がっていけば、当然戸田に会えない人も多くなる。そのことを解決したのが、戸田から直接講義を受けた教学部員が各地に出向いて行う「地区講義」であった。それが、一人一人に内在する生命力²³³を奮い立たせる力になったというのである。講義を担当した人の年齢・性別・学歴は千差万別であった。また当時、創価学会は「貧乏人と病人の集まり」と揶揄されていたが、講義の担当者も例外ではなかった。

戸田は、「この仏法は、逆境にある人が幸せになる宗教なのだ。不幸な人ほど、それを乗り越えたとき、すごい力が出るのだよ。その人こそが、本当に不幸な人びとの味方になれるのだよ」と語っていたという²³⁴。深い悩みと向き合っている人が集い、学び合う中で、自他共の幸福を目指す人々の輪が急速に広がっていったのである。

²²⁹ 座談会「これからの学会青年部」（『聖教新聞』1957年6月16日付）の5面を参照。

²³⁰ 『池田全集・第132巻』、115頁参照。

²³¹ 『聖教新聞』と『大白蓮華』には、会員の質問とそれに対する戸田の答えが、合わせて600以上掲載されている（『大白蓮華』第74号、創価学会、1957年7月、34頁などを参照）。『戸田城聖全集・第2巻』（聖教新聞社、1982年）には、そのうちの283項目が収録されている。

²³² 戸田は、1955年に行われた華陽会で、「今後の創価学会は校舎なき総合大学を作って行くのである」と語っており、学生部の設置に際しては、創価学会学生部を「校舎なき総合大学」と表現している（1959年に作成された「華陽会集録」および『聖教新聞』1956年4月8日付1面を参照）。あわせて、『池田全集・第72巻』の211頁、および、『池田全集・第134巻』の154頁を参照。

²³³ 「生命力」について戸田は、絶筆となった巻頭言「思想の混乱」において、「要するに根本は強き生命力と、たくましく智慧とによって、我が人生を支配していかなくては、本当の幸福は得られないことを知らねばならぬ」（『大白蓮華』第83号、創価学会、1958年4月、1頁）と記している。あわせて、前出の『御書と師弟 2』の55頁および『池田全集・第68巻』の578頁を参照。

²³⁴ 星生八重子「戸田前会長と草創期の婦人部」（八矢弓子編『この日ありて一広布に生きる母の記録一』、聖教新聞社、1977年）、23頁参照。

おわりに

教育者である牧口と創価大学をはじめとする多くの教育機関を創立した池田。この二人をつなぐ存在の戸田もまた教育者であった。『評伝 戸田城聖』上巻では、1945年7月以前の戸田について、小学校や私塾時習学館での教育実践、さらには、彼が著した学習参考書や編集した教育雑誌・学習雑誌などについて詳しく述べている。

しかし、「戸田大学」、そして、創価学会は「校舎なき総合大学、である」という視点で見えていくと、戸田が教育者としての本領を發揮したのは、むしろ1945年7月以降といえないか。池田を、各国の首脳や識者と胸襟を開いて語らうこともできる人間へと育てただけでなく、幾万幾十万人々の心の中に、牧口・戸田・池田の三代に継承されてきた、「創価」の根幹をなす「民衆救済の『大志、』」を根付かせたからである²³⁵。

今、国際社会では、気候変動への対応をはじめとする地球的諸問題の解決のために、各国政府がこれまでの「国益至上主義」の思考を改め、「人類益」に立脚した共存共栄の地球社会を目指す発想の転換が求められている²³⁶。しかしそれは、政府や自治体、企業だけに求められているのではなく、地球に住むすべての人々に同様の自覚と行動が求められている²³⁷。

戸田は、1920年の牧口との出会いから44年までの体験をもとに、『人間革命』という小説を書いた²³⁸。池田は、同じ題名の小説で、戸田が豊多摩刑務所を出所した1945年7月²³⁹から、逝去した58年4月までをつづっている。池田の『人間革命』の「はじめに」には、「一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする」と書かれている。この一文は、戸田が懐いていた「民衆救済の『大志、』」を端的に表現した言葉である。

「人間革命」は、戸田一人の内なる生命の変革から始まった。それは、「戸田大学」によって、戸田から池田へと継承されることになった。そして同時に、「校舎なき総合大学、である創価学会によって、誰もが人間革命の方途を学び、実践することが可能になった。戸田は、「〔創価〕学会は苦しんでいる人々を救うため、広宣流布という仏の仕事をする、最高に尊い組織だ。戸田の

²³⁵ 池田は、戦後の創価学会の拡大が、「戸田先生と『心のギア、をかみ合わせた同志の奮闘から生じた』と述べている（『池田全集・第75巻』、264頁参照）。

²³⁶ 前出、『希望の選択』、103頁参照。あわせて、ノーマン・カズンズ／池田大作「世界市民の対話 平和と人間と国連をめぐって」（毎日新聞社、1991年）の106頁などを参照。

²³⁷ 池田は、識者との対談の中で、「地球環境を改善する『地球革命』といっても、人間自身の変革、つまり『人間革命』が出発点であり、それこそが地球的問題群を解決しゆく王道であると信じています」（R・D・ホフライトネル／池田大作『見つめあう西と東 人間革命と地球革命』、第三文明社、2005年、84頁）、「利己的な貧欲のエネルギーを制御して、自他共の幸福と繁栄の方向へ向かわせていくこと、そして自己に閉ざされた『利己的な生き方、を他者に開かれた『奉仕的な生き方、へと転換していくこと——これが私たちSGIの進める『人間革命』運動の目的です』（M・S・スワミナサン／池田大作『緑の革命』と『心の革命』、潮出版社、2006年、155頁）と述べている。

²³⁸ 戸田が1951年1月20日から1954年8月1日付にかけて『聖教新聞』に連載した「人間革命」を参照。

²³⁹ 戸田は、1945年6月に東京拘置所から豊多摩刑務所に移送されている。

命より大事な組織だ」と、何度も話していたという²⁴⁰。

創価学会では、自らの苦悩に沈んでいた人間が、他人の不幸をも我がこととして悩み、励ます人間（自他共の幸福を目指す人間）へと変革されていく。そして、その人の輪は、幾重にも広がっていった。私は、ここに、今世界が抱える多くの難題を解決する道筋が示されているのではないかと考える。戸田や池田が示した「人間革命」は、「自他共の幸福」を目指す人間を次々と生み出していく運動である²⁴¹。

1945年7月以降の戸田は、会員を励まし育てることに徹していた。縦糸が、池田への「戸田大学、であったとすれば、横糸は、創価学会を舞台とした「校舎なき総合大学、であった。

本稿では、池田が学んだ「戸田大学、はどのようなものであったか、概観的に捉えることにとどまっている。「戸田大学、における教育方法や教育内容に関する研究は、後進の方々に託すこととしたい。

²⁴⁰ 『池田全集・第96巻』、269頁参照。池田は、「それ〔＝創価学会〕は、『苦しんでいる人を放っておけない』『励まさずにはいられない』という、人間の真心で織り成された組織だ」（『池田全集・第130巻』、306頁）と述べている。あわせて、『池田全集・第99巻』の75頁を参照。

²⁴¹ 池田は、「随筆 我らの勝利の大道 89 『創立』の原点に誓う」の中で、「〔創価学会が目指す〕広宣流布は、一人ひとりが我が生命に幸福の宮殿を築きながら、人類が夢見た人間共和の『永遠の都』を建設しゆく大聖業である」（『聖教新聞』2012年11月15日付3面）と述べている。